

第18回 下田歌子賞受賞作品集



主催

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会
岐阜県恵那市・恵那市教育委員会

学校法人実践女子学園

共催

株式会社PHP研究所

後援

岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会

土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会

中津川市教育委員会

東京都日野市・日野市教育委員会・嚶鳴協議会

第18回 下田歌子賞受賞作品集



はじめに

恵那市長
小坂 喬峰
こさか たかね

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」は、本市岩村町出身の近代女子教育の先駆者であり、歌人としても名高い下田歌子先生の生誕百五十年を記念し、平成十五年（二〇〇三年）度から開催しており今年度で十八回目を迎えました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、年度当初から外出自粛や臨時休校など未曾有の事態が発生しました。このような状況の中で、在宅時に本事業をご活用いただければと、例年より一か月早い五月初旬より「志」をテーマに作品を募集したところ、エッセイの部では一、五三五作品、短歌の部では二、一六九作品と、昨年より十ポイント多い応募をいただきました。誠にありがとうございました。また、学校賞を受賞された十八校をはじめ、多くの学校関係者の皆様にも、本事業に取り組んでいただき、心より感謝申し上げます。

お寄せいただいたエッセイは、実行委員会での厳正な事前審査を経た後、作家の童門冬二先生、東洋大学名誉教授の吉田公平先生、実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長の城島栄一郎先生、(株)PHP研究所シニアコンサルタントの寺田昭一先生にご協力をいただき選考を行いました。私も審査員として作品を拝読しましたが、コロナ禍においてもなお、力強く、勇気づけられる作品が多く、感銘を受けました。

また、短歌の部は、実行委員会による事前審査を通過した作品を対象に、市民及び来訪者の皆様の投票審査により、入選作品を決定しました。入選された受賞者の皆様には恵那市在住の書家、神谷慎軒先生に短冊に記していただき、記念品として贈呈しました。

表彰式は、コロナ対策として密を避けるために、恵那文化センターを会場とし、その設備を活用し、恵那市へお越しいただけない皆様にもオンラインによりご参加いただきました。

オンライン形式での表彰式を開催することは、アフターコロナの時代に先駆けた「挑戦」であり、新しい形態を皆様にご提示させていただけたと思っております。

結びに、下田歌子先生はもとより、多くの先人に学び、顕彰し、高い志を学びの中に取り組むことにご賛同いただいているすべての皆様、本事業にご協力いただきました実行委員会の皆様、学校法人実践女子学園の皆様、(株)PHP研究所、ご後援いただきました日野市及び日野市教育委員会、嚶鳴協議会、岐阜県教育委員会、東濃地区各市教育委員会の皆様に心より御礼申し上げます。

第18回 下田歌子賞受賞作品集【目次】

※小学生の部・中高の部の住所は学校所在地です。

はじめに

【審査講評】

コペル君の勇気	恵那市長	小坂 喬峰	3
読むことと書くことの相乗効果	審査委員長・作家	童門 冬二	6
	審査委員・東洋大学名誉教授	吉田 公平	8

受賞者一覧他

小学生の部

◇短歌の部

【入選】

●岐阜県恵那市 池戸 優茉	●岐阜県恵那市 太田 知李	●岐阜県恵那市 小澤 和真	12
●岐阜県恵那市 小林 美紗樹	●東京都日野市 白須 将太		

◇エッセイの部

【最優秀賞】

【優秀賞】

【佳作】

強い心	●岐阜県恵那市	鈴木 空雅	14
ゆめをかなえるために	●岐阜県恵那市	小林 誠之介	14
ぼくのゆめ	●岐阜県恵那市	佐藤 サムエル	15
新しい友達	●鹿児島県志布志市	西村 紅俐	16
もう一度表彰台に立つ	●岐阜県恵那市	安藤 小華	17
命を救うために今出来る事	●岐阜県恵那市	河合 里央羅	17
志	●岐阜県恵那市	佐々木 蓮	18
動物を救いたい	●岐阜県恵那市	山本 祐衣	19
わたしがお姉ちゃんだよ	●鹿児島県志布志市	渡邊 喬香	20

中高生の部

◇短歌の部

【入選】

●岐阜県恵那市 佐藤 秋人	●愛知県東海市 永田 大河	●岡山県岡山市 仁科 紗和子	22
●岐阜県土岐市 堀 聖恋	●岐阜県恵那市 若山 嬉媛		

◇エッセイの部

【最優秀賞】

【優秀賞】

【佳作】

今を生きる……………	●東京都小平市	長沼 咲穂	24
未来……………	●東京都渋谷区	近江 有織	25
言葉の力……………	●岐阜県恵那市	杉山 未来	25
自立した女性になるには？……………	●東京都渋谷区	正木 二葉	26
私が心に決めたこと……………	●東京都渋谷区	井出 寿	27
努力……………	●岐阜県恵那市	阪上 天心奏	28
小さな命に向き合う……………	●東京都渋谷区	佐々木 彩奈	30
心に痛みを持つ人を助ける（第二章）……………	●東京都渋谷区	鈴木 舞	30
ポジティブシンキング……………	●東京都小平市	谷島 菜月	31

一般の部

◇短歌の部

【入選】

◇エッセイの部

【最優秀賞】

【優秀賞】

【佳作】

●兵庫県川西市 沖田 守	●千葉県市川市 小田中 準一	●東京都国分寺市 堀水 芽依	34
●埼玉県東松山市 松下 幸子	●静岡県浜松市 山本 千晶		
「志」は私の「生きがい」……………	●大阪府門真市	西山 鈴華	36
戴帽式……………	●愛知県尾張旭市	浅野 憲治	38
おじさんの教員デビュー……………	●千葉県千葉市	東島 日出夫	39
先の見えない時代を生き抜く教師として……………	●岐阜県恵那市	遠山 直美	41
日本一の「版画のあるまち」へ……………	●岐阜県恵那市	市川 彰	43
おまけの時間をもらうまで……………	●京都府宇治市	小野 利子	44
己に課した約束……………	●山口県下関市	河田 豊子	46
骨髄ドナーとなる……………	●愛知県名古屋市中区	竹本 義昭	48
草原の若者にエールを……………	●愛知県稲沢市	菱川 町子	49

下田歌子賞について……………

【審査講評】

コペル君の勇氣

審査委員長・作家 童門冬二 どうもん ふゆじ

平成二十九年年度の第十五回以来、四回連続で「志」をテーマに募集しています。最初のころは、応募作品全般を通して、テーマのとらえ方・素材の求め方に試行錯誤しているくらいがありました。次第に、自分自身や自分に身近なところに志の材を求める傾向が強くなってきて、今回はそれが完全に定着しました。これは、主催者が意図したというより、応募者の皆さんがそれぞれに試行錯誤される中で、自然に「志」のとらえ方が決まっていたというところで、大変良いことだと思います。

とくに、本年の場合は、コロナ禍ということもあり、小学生、中学生、一般を問わず、いのちを大事にしようということが、応募作品の根底、バックグラウンドに流れていたように思います。

ただ、今年の応募作品を読ませていただいて、一つ気づいたことがあります。それは、ご自身が立てた志を実行する段階になると、薄いか厚いかは別にして、越えなければならぬ壁が共通してあるのではないかということです。つまり、志を実行するプロセスにおける「ためらい」です。善いことをする、志を遂げようとするときに、「ためらい」という壁を乗り越えて一歩歩み出す勇氣が必要な時代になっているのかも知れません。ですから、審査にあたっては、志の内容ももちろんですが、その志を自身なりに、どう勇氣をもつて実現していったのか、もしくは実現しようと努力し行動に移しているのかということに、ウエイトを置きました。

それにつけて思い出すことが一つあります。それは、子どもの頃に影響を受けた一冊の本のことです。昭和十二年（一九三七）に出た吉野源三郎さんという方がお書きになった『君たちはどう生きるか』という本で、今でも岩波文庫に入っていて読み継がれている本です。主人公は、お父さんが亡くなってお母さんと二人で暮らしているコペル君という中学生の男の子です。コペル君というのは、おじさんが、科学者のコペルニクスにちなんでつけたあだ名ですが、そのコペル君が日常生活の中で出会ういろいろな体験を通して考え、学んだことが描かれています。その中にこんな話があります。

ある日、学校で、仲のいい友達とあそびをします。担任の先生が入ってきて、そのあそびに気づき、「だれがはじめたのだ、名乗って出なさい」と言います。友達は真っ先に「ぼくがやりました」と出ていきます。しかし先生は、「これは一人ではできないあそびだ。他に

もいるだろう」と重ねて言いました。それを聞いて、コペル君は、出ようという意思が強く働くけれども、ついに出ませんでした。そして、「自分なんて意気地のない人間だろう。友達はずっと出ていったのに、自分は黙っていた。その友達に対しても裏切り者になった」と、非常に悩みます。ある時、コペル君の表情があまりに暗いので、お母さんが内職の手を休めて「どうしたの」と聞きました。お母さんにつつま隠さず話すと、お母さんは、「お母さんにもそれに似た思い出があるのよ。女学校時代に、下校の途中で、重い荷物を持って神社の階段を登ろうとしているおばあさんに出くわしたの。荷物を持ってあげたいなあと思ったけれど、思うことが口に出ないし行動にも移せない。結局、おばあさんは、階段を登り切って、そのまま行ってしまったの。お母さんは、荷物を持ってあげようという言葉が出なかったのをすごく後悔したの。そして、気持ちがあるのに口にも行動にも出ないというのは、やはり、勇気がなかったからだと気づいたの。コペル君の今の悩みは、みんなが感じることなのよ。だから、気にしすぎずに、もっと気持ちを楽にしないさい。ただ、二度と、同じことをしないこと。今度、同じようなことがあったら勇気をもって前へ出ようね」と言いました。

半分はお母さんのつくり話かも知れないと思いますが、コペル君は、母親の愛というかやさしさに胸キュンで、救われた思いをします。今回、入選された作品を拝見すると、受賞者の皆さんは、コペル君がお母さんから教えられた「勇気」をすでに発揮されておられる方々ばかりでした。入選作品を拝読して、「志は、ただ観念的に立てているだけでは絵に描いた餅。実行に移して初めてその志が生きてくるし、自分のアイデンティティを世間にも知らせることができる」ということを改めて学ばせていただきました。そして、昔から言われる「ひとりとはみんなのために、みんなはひとりのために生きているんだ」という言葉をしみじみと思い出しました。その意味では、満九十三歳になってもまだまだ頑張りたいと思っている私に対する励ましも多々込められた作品たちだったなあと、応募者の皆さん、入選者の皆さんに、改めて感謝します。ありがとうございます。

童門冬二：昭和二年（一九二七）、東京生まれ。東京都広報室長、企画調整局長、政策室長など要職を歴任後、退職し作家活動に専念。在職中に培った人間管理と組織の実学を歴史と重ね合わせ、小説、ノンフィクションの世界に新境地を開く。『小説 上杉鷹山』『小説 佐藤一斎』『家庭こそ最良の学校です』下田歌子先生の生き方・考え方』（恵那市ふるさと学習読本）など、著書は六百冊以上。

【審査講評】

読むことと書くことの相乗効果

審査委員・東洋大学名誉教授 吉田 公平よしだ こうへい

来し方を回想し、行く末を展望する——書くということは、今、生きている、現存している（現に生きている）我々が回想と展望を行なうことである。今回の皆さんのエッセイには、コロナ禍害という「この今」の状況が浸透しているなあ、というのが素直な実感である。どなたの作品も、たるみがなかった。その意味ではまことに甲乙つけがたい。とくに社会人の方々の文章は緊密観が満ちていた。エッセイ賞という事業の性質上、選外になるものが出るのはやむをえないが、選外になっても、殊更に落胆されることは無用である。今後とも、「書く」ことをいとわずに、自らの人生を豊かにしていただきたいと祈念します。

若い皆さんのエッセイは、人生経験が短いので、多くを望むのは酷である。しかし、その中にあつても、きらりと光るものを感じさせるものがあった。のっぺらぼうの経験をいくら積み重ねても、その経験は豊かな滋養を与えてくれない。「今の状況」に対する関心と思索が滋養になる。その思索・実感をその場限りにせずに、蓄積するのが文章化することである。書くことを積み重ねていくと、自らが書くこととしていくことの深部が見えてくる。それを文章化するときに、推敲を重ねると、自分の実感が明晰になる。すると、その文章は豊かになるに違いない。文章は自分の頭の中で、空で書き上げようとするだけでは、表現が拙いものに終わってしまう恐れが多分にある。それを避けるためには、名著といわれる作品を、自分の好みに合わせて丹念に読みこなすことである。一文の長さ、修飾語の使い方、主語・述語の配置など、そのつもりで読めば、多くのことを気づかせてくれるに違いない。読むことと書くことは相乗効果をもたらす。

もう一点、下田歌子賞は、下田歌子を称賛するための賞ではないことを、肝に銘じて貰いたい。

吉田公平…昭和十七年（一九四二）、宮城県岩沼市生まれ。東洋大学名誉教授。中国哲学・日本近世思想史専攻。

「陽明学」を中心に西洋思想と比較、今日的な意義を探究する。現在は、ふるさと岩沼を拠点に、中国思想、日本思想の研究・啓蒙活動を展開。『陸象山と王陽明』『日本における陽明学』『中江藤樹心学派全集』など著書多数。

第18回 下田歌子賞 受賞者一覧

エッセイの部 テーマ「志」

■小学生の部

(氏名五十音順 応募総数：115作品)

賞	タイトル	名前	学校名
最優秀賞	強い心	鈴木 空雅	岐阜県恵那市立岩邑小学校 6年
優秀賞	ゆめをかなえるために	小林 誠之介	岐阜県恵那市立岩邑小学校 5年
	ぼくのゆめ	佐藤 サムエル	岐阜県恵那市立岩邑小学校 5年
	新しい友達	西村 紅俐	鹿児島県志布志市立松山小学校 6年
佳作	もう一度表彰台に立つ	安藤 小華	岐阜県恵那市立岩邑小学校 6年
	命を救うために今出来る事	河合 里央羅	岐阜県恵那市立岩邑小学校 6年
	志	佐々木 蓮	岐阜県恵那市立岩邑小学校 5年
	動物を救いたい	山本 祐衣	岐阜県恵那市立岩邑小学校 6年
	わたしがお姉ちゃんだよ	渡邊 喬香	鹿児島県志布志市立松山小学校 4年

■中学生の部

(氏名五十音順 応募総数：1,188作品)

賞	タイトル	名前	学校名
最優秀賞	今を生きる	長沼 咲穂	東京都・白梅学園高等学校 1年
優秀賞	未来	近江 有織	東京都・実践女子学園高等学校 1年
	言葉の力	杉山 未来	岐阜県恵那市立山岡中学校 3年
	自立した女性になるには？	正木 二葉	東京都・実践女子学園中学校 1年
佳作	私が心に決めたこと	井出 寿	東京都・実践女子学園高等学校 1年
	努力	阪上 天心奏	岐阜県恵那市立岩邑中学校 1年
	小さな命に向き合う	佐々木 彩奈	東京都・実践女子学園中学校 2年
	心に痛みを持つ人を助ける (第二章)	鈴木 舞	東京都・実践女子学園中学校 2年
	ポジティブシンキング	谷島 菜月	東京都・白梅学園高等学校 1年

■一般の部

(氏名五十音順 応募総数：222作品)

賞	タイトル	名前	住所
最優秀賞	「志」は私の「生きがい」	西山 鈴華	大阪府門真市
優秀賞	戴帽式	浅野 憲治	愛知県尾張旭市
	おじさんの教員デビュー	東島 日出夫	千葉県千葉市
	先の見えない時代を生き抜く教師として	遠山 直美	岐阜県恵那市
佳作	日本一の「版画のあるまち」へ	市川 彰	岐阜県恵那市
	おまけの時間をもらうまで	小野 利子	京都府宇治市
	己に課した約束	河田 豊子	山口県下関市
	骨髄ドナーとなる	竹本 義昭	愛知県名古屋
	草原の若者にエールを	菱川 町子	愛知県稲沢市

短歌の部 テーマ「志」

■小学生の部

(氏名五十音順 応募総数：999作品)

賞	短歌作品	名前	学校名
入選	小さい子 たくさんえがお 見たいから 地元恵那市で 保育士めざす	池戸 優茉	岐阜県恵那市立中野方小学校 4年
入選	しょうらいは えがおを作る 料理人 未来の料理 どんどうかぶ	太田 知李	岐阜県恵那市立明智小学校 4年
入選	ありがとう 父さん母さん 今までの 感謝の気持ち 倍に返すぞ	小澤 和真	岐阜県恵那市立岩邑小学校 6年
入選	しょうらいは 命を救う 医師になる みんなの笑顔 私が守る	小林 美紗樹	岐阜県恵那市立大井小学校 6年
入選	CO ₂ 増やさぬために エコバッグ ぼくの子どもの 未来のために	白須 将太	東京都日野市立南平小学校 3年

■中学生の部

(氏名五十音順 応募総数：844作品)

賞	短歌作品	名前	学校名
入選	ながす汗 ながす涙で さがす夢 汗と涙で かがやく未来	佐藤 秋人	岐阜県立恵那南高等学校 1年
入選	人は皆 はじめの一歩で 踏み出して 自分の未来を 捜しに行く旅	永田 大河	愛知県東海市立富木島中学校 3年
入選	勉強し 小さくなってく この消しゴム 大きくふくらむ 私の将来	仁科 紗和子	岡山県立岡山操山中学校 2年
入選	親からの たった一度の 贈りもの その名に恥じぬ 大人になりたい	堀 聖恋	岐阜県立岐商業高等学校 2年
入選	あいさつは 人の心を 照らしてる 照らしてもらえば 笑顔になれる	若山 嬉媛	岐阜県恵那市立恵那西中学校 2年

■一般の部

(氏名五十音順 応募総数：326作品)

賞	短歌作品	名前	住所
入選	本棚に 残る書籍に 青春の こころざしみゆ 懐かしき日日	沖田 守	兵庫県川西市
入選	教え来し 職終えて今 われ学ぶ 市民講座の 灯火の下に	小田中 準一	千葉県市川市
入選	折れそうな 心にいつも 喝いれる 母の付箋と 愛情弁当	堀水 芽依	東京都国分寺市
入選	手料理を 振る舞う店を 開きたく 夫婦で待つは コロナの終焉	松下 幸子	埼玉県東松山市
入選	寝がえりす 子もいつの日か みずからの 志す道 歩む日のくる	山本 千晶	静岡県浜松市

第18回 下田歌子賞 学校賞受賞校

学校賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、もしくは両方に、学校で取り組んでいただき、応募数が顕著に多かった学校に授与させていただく賞です。

	学校名	所在地	受賞対象部門
小学校	恵那市立岩邑小学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	恵那市立武並小学校	岐阜県恵那市	エッセイ
	恵那市立飯地小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立中野方小学校	岐阜県恵那市	短歌
	日野市立南平小学校	東京都日野市	短歌
小中一貫校	渋谷区立渋谷本町学園	東京都渋谷区	短歌
中学校	恵那市立岩邑中学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	恵那市立山岡中学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	多治見西高等学校附属中学校	岐阜県多治見市	エッセイ
	実践女子学園中学校	東京都渋谷区	エッセイ
	恵那市立明智中学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立串原中学校	岐阜県恵那市	短歌
	岡山県立岡山操山中学校	岡山県岡山市	短歌
	東海市立富木島中学校	愛知県東海市	短歌
高等学校	実践女子学園高等学校	東京都渋谷区	エッセイ
	白梅学園高等学校	東京都小平市	エッセイ
	岐阜県立恵那南高等学校	岐阜県恵那市	短歌
	岐阜県立土岐商業高等学校	岐阜県土岐市	短歌

第18回 下田歌子賞 審査委員

童門 冬二 ◎作家（審査委員長）
 吉田 公平 ◎東洋大学名誉教授
 城島 栄一郎 ◎実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長
 寺田 昭一 ◎月刊誌「歴史街道」特別編集委員、PHP 研究所シニアコンサルタント
 小坂 喬峰 ◎岐阜県恵那市長

第18回 下田歌子賞 主旨・共催・後援

【主催】 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会

岐阜県恵那市・恵那市教育委員会

学校法人実践女子学園

【共催】 株式会社 PHP 研究所

【後援】 岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会・土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会・中津川市教育委員会

東京都日野市・日野市教育委員会

嚶鳴協議会（大野町〈岐阜県〉、沖縄市〈沖縄県〉、小田原市〈神奈川県〉、釜石市〈岩手県〉、
 木曽町〈長野県〉、高鍋町〈宮崎県〉、多久市〈佐賀県〉、竹田市〈大分県〉、田原市〈愛知県〉、
 東海市〈愛知県〉、長野市〈長野県〉、日田市〈大分県〉、養父市〈兵庫県〉、米沢市〈山形県〉、
 恵那市〈岐阜県〉）

第
18
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

小学生の部

恵那市民が選ぶ「志」の歌

小さい子たくさんえがお見たいから
地元恵那市で保育士めざす

池戸 優菜 詠

小さい子 たくさんえがお 見たいから

地元恵那市で 保育士めざす

岐阜県恵那市立中野方小学校四年

池戸 優菜

しょうらいは えがおを作る 料理人
未来の料理 どんどんうかぶ

太田 知李 詠

しょうらいは えがおを作る 料理人

未来の料理 どんどんうかぶ

岐阜県恵那市立明智小学校四年

太田 知李

ありがとう 父さん母さん 今までの
感謝の気持ち 倍に返すぞ 小澤和真 詠

ありがとう 父さん母さん 今までの
感謝の気持ち 倍に返すぞ

岐阜県恵那市立岩邑小学校六年

小澤 和真

しょうらいは 命を救う 医師になる
みんなの笑顔 私が守る 小林美紗樹 詠

しょうらいは 命を救う 医師になる
みんなの笑顔 私が守る

岐阜県恵那市立大井小学校六年

小林 美紗樹

CO₂ 増やさぬために エコバッグ
ぼくの子どもの 未来のために 白須将太 詠

CO₂ 増やさぬために エコバッグ
ぼくの子どもの 未来のために

東京都日野市立南平小学校三年

白須 将太

強い心

岐阜県恵那市立岩^{いわ}田^{わた}小学校六年 鈴木^{すずき} 空雅^{くうが}

「強い心」。強い心とはどんな心をいうのか考えたことはあります。力が強いこと？けんかが強いこと？声が大きいからその意見が通ること？ぼくが考える強い心とは、どんなことにも挑戦し勇気をもって実行する心、仲間を大切にする心、根気よく取り組む心だと考えます。ぼくはまだまだ強い心とは言えないので、強い心になるために、がんばることを三つ宣言します。

一つ目は、何にでも挑戦し、それを行動に移すことです。ぼくは、「苦手だな」「難しそうだな」と思うことを、最初からあきらめてしまふことがあります。でも強い心になるために、自分自身を「がんばろう」「できる」とはげまし、難しいことや、本当はやってみたかったことを、まずはやってみようと思います。今、学級委員をやっています。それをいかして後期は児童会執行部に挑戦し、リーダーとして全校を引っ張っていきたいです。

二つ目は、自分から声をかけ、仲間をつくることです。今、サッカーをやっているけれど、岩田の子以外に声をかけ、仲良くすることができていません。また、高校生になると周りには知らない人ばかりで、心細くなることがあるかもしれません。だからまずはクラスの中の困っている人に自分から声をかけ、手助けすることをして

いきます。そうすると、その子もうれしいと思うし、自分自身の勇気にもつながると思うからです。

三つ目は、これからも毎日自主学習を続けることです。二年生の終わりごろから、今まで、毎日自主学習に取り組んできました。計算や漢字以外にも、理科のテスト勉強や、社会に出てくる語句まとめなど、どんなことができるか考えて取り組んでいます。習い事がある日も、少しでも時間を見つけ、机に向かう努力をし続けます。

ぼくは将来、サッカーにかかわる仕事をしたいと思っています。挑戦すること、仲間を大切にすること、根気よく取り組むことは、仕事をするうえでとても大切になってくると思います。これから先、難しいことがあっても、こつこつ取り組むことや、立ち向かっていく諦めない強い心を持ち、どんな壁でも乗り越えていきます。

優秀賞

ゆめをかなえるために

岐阜県恵那市立岩^{いわ}田^{わた}小学校五年 小林^{こばやし} 誠之介^{まことすけ}

ぼくには強い志があります。それは大工になって色々な人の家を作って喜んでもらったり自分の家を建てたりすることです。ぼくはものを作るのが好きなので欲しいものやいいものと思ったもの、買うまでがまんできないものの中で、

「これはつくれそうだな」

と思ったものは、今持っている材料で考えて作ることをがんばっています。

しかし、たまに持っている材料を考えず作ることを考えてしまったり、作るときに失敗してしまうことがあります。他には、ほとんど設計図を書かずに作ってしまったり失敗することもありますし、設計図を書いても材料のことを考えずに作ってしまったり、作るときに何が必要なのか分からなくなる時があります。大工になるときは計画を立てる力や想像力が必要だと感じたので、ばくに足りない力を今からつけるために、どんなことをしたらいいのか考えてみました。

まず、設計図を描くためには、算数の計算や図形の勉強が必要だと思いました。それから理科の知識も必要です。何故かと言うと、家で作品を作っていた時に接着剤をビニールテープにつけたら発熱してビニールテープから変なにおいがしたからです。物の性質をわかっているないと危険な目にあうのだと言うことがその時わかりました。さらに人に説明するためには国語や英語、ものを組み立てるには図工、土地を理解するためには社会、体力をつけるためには体育の力が必要そうだと思いました。結局すべての学校の教科が大切だということがわかりました。

僕は、勉強が苦手です。けれども、夢を叶えるためには、学校の勉強が必要なことに気がついたので、勉強を前よりも前向きにがんばって取り組んでみようと思いました。いやになることはあるかもしれないけれど、志を持つ事は大切だと思うので、がんばりたいです。

優秀賞

ばくのゆめ

岐阜県恵那市立岩田小学校五年 佐藤 サムエル

ばくには今がんばりたいことがあります。それは漢字の勉強です。ばくの家ではお父さんとお母さんがポルトガル語で話をするので、ばくもポルトガル語で話したり文字を書いたりすることがふつうでした。しかし、学校では友達も先生もみんな日本語でしゃべるし、教科書やテストも日本語でかかれていますので困ることが多いです。特に漢字が覚えられなくて困っているのです。漢字の勉強がめんどくさく感じることもあるのですが、それでも漢字をがんばりたいと思うのには理由があります。それは、これから先も日本でくらししていきたいと思っているからです。

ばくは小さいころに、ブラジルとアメリカそしてイスラエルに行ったことがあります。日本と比べて、どの国もそれぞれとくちょうがありました。家族で旅行に行ったので、どの国も楽しい思い出がのこっているのですが、ずっとそこに住んでいたいかと考えると、ばくの住みたい国は日本でした。日本は他の国と比べて安全だと思います。アメリカのような大きなショッピングストアや、ブラジルやイスラエルのようなにぎやかさはありませんが、日本には悪い人が少ないと思うからです。他の国では、人の家のものを持っていってしまう人がいたり、もっと悪いことをしようとする人がいたりし

ました。怖い思いをしたこともあったので、ぼくはこれから先も日本ですくすく生きていきたいです。

そのために、ぼくは日本語の勉強をがんばりたいです。ひらがなやかたかなは読めるので、あとは漢字をがんばって勉強すればいいでしょうぶだと思います。何度もノートに書いて練習して覚えたいです。日本語が読めるようになれば、算数や理科、社会も今よりわかるようになると思うので、まずは日本語をがんばりたいです。学校が変わってもうすぐ一年経ち、今の小学校にもなれてきたので、勉強だけでなく、友達とも仲良く過ごしていきたいです。

優秀賞

新しい友達

鹿児島県志布志市立松山小学校六年 西村 紅俐

五年生の十二月、体育館で全校朝会がありました。でも、それはいつもとは少し違いました。それは、新しい転入生がいたのです。しかも、外国人が三人も。私は、「どこの国から来たんだろう。外国人と話したことないからどきどきするなあ」と思いました。先生の話で、三人の姉弟は、パキスタンという国から来たことが分かりました。私は、パキスタンという国を初めて聞いたので、「どんな国なんだろう」とわくわくしてきました。自こしょう介では、かたことだけで日本語でしっかりと名前を言っていました。二人は私と

同じ五年生で、一人は三年生の妹でした。

始業式が終わり、男の子と女の子の二人が増えて十七人での勉強が始まりました。

まず、学校のきまりを一つ一つ教えることから始めました。でも、言いたいことが上手く伝わらないときがありました。そうすると二人は、ウルドゥー語というパキスタンの言葉でお互いに通訳をしていました。私は、初めて聞くウルドゥー語に「おお、すごい」と思いました。ものすごい速さで早口言葉のようでした。

給食の時間は、パキスタンのしゅう教のイスラム教では、食べられないものもあるのでお弁当を持ってきました。中身を見せてもらうと見たことのない食べ物がいっぱいでした。

他にも日本とはいろいろな文化の違いがあります。私たち日本人とは意見が違うときもあります。それが原因で上手く話せないときもありました。でも、もし、私がぎやくの立場なら、全く知らない国で過ごすのは本当に大変なことだと思います。だから、私は、疑問に思ったことは素直な気持ちで話を聞いて、一つ一つ時間をかけて何度も何度も話し合い解決していけばいいと思います。その場の中心に立てる勇気が私にあると思います。

もう一度表彰台に立つ

岐阜県恵那市立岩邑小学校六年

安藤 小華 あんどう こはる

もう一度表彰台に立ちたい。私は、兄の空手に取り組む姿を見て、そう思いました。

私は、今まで努力をせず、物事から逃げてしまうことがいくつかありました。その一つが、八年続けている空手です。昔は、優勝や準優勝をしていたけれど、最近では、あまりいい成績を残すことができていません。また「なんで空手を始めたんだろう」「もうやめたいな」と思うことも少なくありません。でも私が空手を始めたきっかけは兄たちです。その兄たちがどんなにっらい練習でも楽しそうにやっているのを見て、私ももう一度挑戦しようと思い始めました。今の私に足りないのは努力する心です。その心をきたえるために、特になんばりたいことが二つあります。

一つ目は、逃げていた空手の練習です。練習は週に二回ありますが、道場に行かなくても家でできることに取り組みます。まず柔な体操です。体をやわらかくしておくことと相手からの攻撃に素早く対応することができます。次に突きの練習です。前に力強く出す動きを、集中して百回行ないます。道場でも空手に対して気持ちが入っていないので気持ちをを入れ替えて取り組みます。

二つ目は、勉強です。私は、勉強がとても苦手です。でも勉強が

好きになるためには、自主学习で、授業で間違えた問題にもう一度取り組んでみます。それから、分からなかった問題から逃げずに、先生や友達に聞いたり教えてもらったりして、克服していきます。そうするとできるようになってうれしくなると思っています。勉強と空手は関係のないことのように思うけれど、逃げない強い自分になれば、空手にも真剣に取り組む自分になると思うからです。もう一度表彰台に立つて、メダルや賞状をもらいたい。そのため、今よりもっと努力が必要になると思います。でも、あきらめない自分になって将来の夢が見つかったときに努力し続ける自分になるために、私は頑張り続けたいです。

命を救うために今出来る事

岐阜県恵那市立岩邑小学校六年

河合 里央羅 かわい りあろ

二百二十五頭、これは一日に殺処分される犬やねこのおよその数を表したものです。

私は小学四年生の時下田歌子先生を知りました。歌子先生が世の中のルールにさからい新しいルールをつくった事を知った私は「すごい、私も正しい事を正しいと言える人間になりたい」と思いました。でも今の私は「だれかとやろう」と一人では何もできませんでした。「失敗したらどうしよう」「これが正しい事じゃなかったらど

うしよう」と挑戦しようとするたびにやった後の事を考えてしまう自分があるからです。これが私自身が乗りこえなければいけないかべです。

私はこの世の中にも大きなかべがあると思います。それは犬やねこの殺処分です。私は犬やねこが大好きです。だから犬やねこが人間のせいで殺される事を知った時「なぜ人に必要ないと思われるただけで簡単に命を殺してしまうの。犬やねこに罪はないのに。ひどい」と思いました。でも「ひどい」と思うだけでは何も変わりませんでした。毎日のように何百頭もの命が殺され、犬やねこを捨てた人たちは何事もなかったように毎日を過ごしてゆく——私はこんな世の中に反対です。

私は今ハムスターを二ひき飼っています。名前はチーズとブルーです。八月で一才になりました。ハムスターのじゅ命は一から四年です。私の目標はチーズもブルーも四年生きる事です。そのために今がんばっているのは体に良い野菜をあげたり毎日体調を確認する事です。大変だけれど毎日しっかりやって大切に育てています。

私の夢は殺処分ゼロです。そのために今は保護しせつへの寄付をしたいです。なぜかというとハムスターを育ててみて育てる大切さが分かったからです。だから育てるのに必要なご飯を寄付して少しでも協力していきます。ハムスターも命をもっているので大切に育てていきたいです。

佳作

志

岐阜県恵那市立岩田小学校五年 佐々木 蓮

ぼくは、将来、人をよろこばせたり、人の役に立つことができた人になりたいです。そしてぼくは、人の役に立ち、よろこばせてあげられる料理人になりたいと思っています。料理人は美味しい料理を作って人を幸せにすることができからです。

ぼくは、まだ料理をすることで人の役に立つことができないので、まず人の役に立つために、人が落としたものを届けてあげたり、人のやっていることを手伝ってあげたり、人が困っていたら助けてあげたりしています。

ぼくにはもう一つ心がけていることがあります。それは、自分に親切にしてくれた人には必ずお礼を言うことです。人の役に立ちたいという思いをもつべくですが、人の机の上に乗っているものを落としてしまうことがあります。筆箱などを落としてしまうときには多くの人が助けてくれるのですが、そんなときには、せめて感謝の気持ちが伝わるようにありがとうと言いたいです。ぼくはお礼を言われるとうれしいので、相手にも伝えたいです。

ぼくはお母さんにあこがれています。その理由は、いつもおいしい料理を作ってくれているからです。お母さんの料理はいつもおいしくて、ぼくは幸せな気持ちになります。だからぼくはお母さんの

ようにおいしい料理を作れるようになって、たくさんの人を幸せにできるような料理人になりたいです。ぼくには大人になったら自分のお店を開くという夢があるので、そのためにもがんばって努力したいです。

ぼくはこれから人の役に立ち、人を笑顔にできる自分になりたいです。今は知っている人にしか力になることができませんが、勇気を出して知らない人が困っていても助けてあげられるような人になりたいです。人を助けるためには自分に力がついていなければ助けられないので、料理だけでなく、様々なことに積極的にチャレンジしていきたいです。

佳作

動物を救いたい

岐阜県恵那市立岩田小学校六年

山本 祐衣^{やまもと ゆい}

「どうして人は自分から動物を『飼いたい』と言っているのに、動物を捨ててしまうのだろう」そんな疑問を持ったのは、五年生の時でした。ある本を読んだ時、そんな動物はとてもかわいそうだと思うた事がきっかけです。

世の中には、すごくたくさん犬やねこがいます。しかし、その全ての犬やねこが幸せなくらしをしているわけではありません。捨てられたり、きずをつけられてしまう動物も知らないだけで、数多

くいます。

さらに、飼い主がただおこっけていても動物には全く意味がわからず、なぜおこられているのか、理解できません。なのに、「言う事を聞かない」と人の勝手なかんちがいだ動物をきずつけたり、捨ててしまったりするのは、とてもかわいそうな事だと私は思いました。そこで、私は、そんなかわいそうな動物を救ってあげたいと思いました。捨てられてしまった動物は、必ず助かるわけではありません。殺処分されてしまうのです。動物は人のおもちゃでもひまつぶしでもありません。一つの命です。人があきたからと言って、決して捨てて良いわけではないのです。

このような思いから、私は、「最後まで責任を持ち、動物の気持ちを考えたうえで、動物を飼う事」が大切だと思いました。そして、かわいそうな動物を救って、動物の殺処分をゼロにしていきたいです。

そのために、思いやりの心を忘れないようにすることが大切だと思います。だから、まず、今自分にできることを積極的に取り組もうと思いました。ポスターを作ったり、近所の情報を集めたりなどをしていきたいです。そうすれば、きずつく動物を助けることができるし、野良の動物で困ってしまっている人を助けることもできると思ったからです。また、その時自分ができることを探して実行すること、夢への一歩になれると思ったからです。そして、みんなが動物にやさしく、犬やねこの気持ちをしっかりと考えられる人ばかりの世の中にしていきたいです。

わたしがお姉ちゃんだよ

鹿児島県志布志市立松山小学校四年

わたなべ
きょうか
渡邊 喬香

「今年は、家族がふえるぞ。四人きょうだいになるぞ」

正月に、お父さんが教えてくれました。お母さんはにこにこして
いて、わたしもうれしくなりました。生まれてくる赤ちゃんとうた
しとは、十才も年がちがうことになります。妹たちのときは、わた
しが保育園生で、何も手伝いができなかったけれど、今度はおむつ
をかえたり、いっしょに遊んだりできそうです。

ある日、わたしがけん道の練習から帰ってくると、お母さんがお
なかがいたくて横になっていました。いつもは元気に、

「お帰り」

と声をかけてくれるのに、お母さんの元気がないすがたを見て、
とても心配しました。わたしに何かできることはないかなと考えて、
ふろそうじをしました。お母さんはおなかが大きくなってから、ふ
ろそうじが大へんだと言っていたからです。お母さんは、温かいふ
ろがわいているのを見て、とてもよろこんで、

「喬香が手伝ってくれたおかげでゆっくおふろに入れたよ」

と言ってくれました。お母さんのおなかに手を当てると、とても
温かく、赤ちゃんもぼこぼこと元気に動いていました。わたしは二
人が元気になって安心しました。

わたしの住む志布志市では、新がたコロナウイルスが発生してい
ます。わたしの家でも、お母さんと赤ちゃんがかからないように、
外から帰ったら、必ずうがいや手あらいをします。妹たちがわすれ
ていたら、いっしょにするのがわたしの仕事です。

これからも、何か手伝えることはないかと考えて、お母さんが元
気な赤ちゃんをうめるようにいっしょにがんばりたいです。

「おうい、赤ちゃん。早く出ておいで。わたしがお姉ちゃんだよ。
いっしょにたくさんさんの思い出をつくらうね。まってるよ」

第
18
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

中高生の部

恵那市民が選ぶ「志」の歌

ながす汗　ながす涙で　さがす夢
汗と涙で　かがやく未来



ながす汗　ながす涙で　さがす夢
汗と涙で　かがやく未来

岐阜県立恵那南高等学校一年　佐藤秋人

人は皆　はじめの一步で　踏み出して
自分の未来を　探しに行く旅



人は皆　はじめの一步で　踏み出して
自分の未来を　探しに行く旅

愛知県東海市立富木島中学校三年　永田大河

勉強し 小さくなってく この消しゴム
大きくふくらむ 私の将来

仁科
紗和子

勉強し 小さくなってく この消しゴム

大きくふくらむ 私の将来

岡山県立岡山操山中学校二年 仁科 紗和子

親からの たった一度の 贈りもの
その名に 恥じぬ 大人になりたい

堀 聖彦

親からの たった一度の 贈りもの
その名に恥じぬ 大人になりたい

岐阜県立土岐商業高等学校二年 堀 聖彦

あいさつは人の心を 照らしてる
照らしてもらえば 笑顔になれる

若山 嬉媛

あいさつは 人の心を 照らしてる
照らしてもらえば 笑顔になれる

岐阜県恵那市立恵那西中学校二年 若山 嬉媛

今を生きる

東京都・白梅学園高等学校一年 長沼 咲穂 ながめま さほ

「将来こんな人になりたい」とか、「大人になったらあの職業に就きたい」とか。明確な目標だけが「志」と呼べるのでしょうか。私はそう思いません。未来へのビジョンがなくても、それらを見つけようとすることも十分な「志」と言えると考えています。

以前の私はよく、将来への不安にかられていました。大学はどこに行くべきなのか。そこで学ぶとどんな仕事に就けるのか。早急にやってみたい職業を見つけなくては。でもやりたいものなんてない。ぐるぐると何度も同じことを考えてしまい、苦しむばかりでした。しかし、ひとたび冷静になって考えてみると、大学や職業が決まっている人はごく少数であることに気が付きました。ただ、兄や幼馴染がそうした人たちだったので、焦りや不安が生まれてしまっただけでした。周りを見てみると、将来を考えるのではなく、今に重きを置いている人が多くいました。いきなり大きな目標を持たなくたっていいのです。今を一生懸命に生きることが、将来につながるのです。そう分かった途端、今まで張りつめていた息が楽になったような気がしました。

現在、私は様々なことに挑戦しています。中学までやっていた吹奏楽から、高校では茶道部と演劇部に入りました。でも、そこには

「将来の糧になるかもしれないから」とか、「やりたい職業を見つけられるかもしれないから」といった考えはありません。ただ、今興味があるからです。今を楽しめればいい。そんな軽い気持ちで始めたことですが、気が付けばもつと極めたい、上手くなりたい、と思うようになりました。袱紗を綺麗にたたみたい。外郎売を覚えたい。そういった小さな「志」が、私の中に芽生え始めたのです。それも、意図せずに。自然に生まれたものでした。今まで無理矢理大きな「志」を見つけようとしていた私にとって、自然と「志」が見つかったことは、大きな変化でした。

将来への大きな目標だけが「志」とは限りません。どんなに小さなことでも、向上心があれば十分に「志」と言えるのではないのでしょうか。そして、これらは気が付くものです。見つけよう、見つけようと思えば思うほどに、「志」は見つけられなくなると思います。見つける手段は、今を生き、今を楽しむこと。そうすれば、小さな目標が自然とできるでしょう。そして、その小さな目標を諦めず積み重ねていけば、きっと将来へつながります。

将来への道を開くために、私は今を一生懸命楽しもうと思います。いろいろなことを体験し、大きくとも小さくともいい、目標を見つめます。それが今の私の「志」です。

未来

東京都・実践女子学園高等学校一年 近江^{おうみ}有織^{ゆり}

現在、私たちは、歴史的に見ても、何十年、何百年ごとに起こるような時を迎えています。それは、病原菌であったり、戦争であったり、気候変動であったりします。今回は、コロナでした。コロナが、人為的産物なのか、自然発生したものなのかは、何年後かに明らかになることかと思いますが、遠い国で起こっていることと、他人事のようにとらえていたのも束の間、瞬く間に全世界を巻きこみ、人々を苦しめ、果ては、経済状態の悪化を引き起こしました。そんな状況下で、生きるために本当に必要なものは何か、また、逼迫したもとで動き続けることが必須な仕事は何かを考えさせられる機会でもありました。

私が、目指している仕事は、看護師です。幼い頃から、祖父母が病院にお世話になることが多くそこで働いていらっしやる看護師さんたちへの淡い憧れが初めで、ずっと将来はと聞かれると何となく看護師と答えてきました。

コロナ禍で、その仕事の重要性にも改めて気づかされました。それは、自分自身も危険と隣合せであると同時に、自分の家族をも同じ状況にあわせることにもなってしまいうことにもなります。実際、報道等で、医療従事者やそのご家族が、意味のない中傷や扱いを受けて苦勞されていることが知らされています。ですが、人がこの世

に生を受けた時から、死ぬ時まで、お世話になるのは、看護師さんです。生まれて初めて産湯につけてくれ、死に際しては、ご家族が少しでも悲しみが減るようにご遺体をきれいにしてくれまます。なくてはならない仕事だと思っています。

地球は、温暖化が着実に進み、今まで氷河によって隠されていた病原菌も現れてきたり、温度上昇による弊害もさらに出て来ると思います。人類が招いたこととはいえ、向き合って改善、対処していかなければなりません。またAI化も進み、人の手を必要としない世界になることも考えられます。それもまた、仕方のないことかもしれないですが、完全にそうなったとしても、人のぬくもり、思いやりの心が必要じゃなくなるとは思いたくありません。

だから、私は、可能であれば、人に心を伝えることのできる看護師を目指したいと考えています。

人の一生に寄り添うことのできるその仕事が必要とされる世界である限り、微力ではありますが、頑張りたいのです。みんなが少しでも笑顔でいられるように。早くコロナがおさまりますように。

言葉の力

岐阜県恵那市立山岡中学校三年 杉山^{すぎやま}未来^{みく}

今、世の中ではSNSが活発に使われている。SNSは、誰でも

簡単に世界中の人とコミュニケーションをとることができる。そのため、SNSに対して楽しい、便利とプラスな思考を持っている人が多いだろう。しかしその一方で、使い方を誤ればSNSは人を殺してしまう凶器にもなるということを知っているだろうか。

私は最近、よくこんなニュースを耳にする。芸能人の方が自殺をしよう、という内容のものだ。その理由のほとんどがSNSによる誹謗中傷である。SNSは匿名を使うことができる。そのため、相手には自分が誰なのか分からない。だから、実際よりも軽い気持ちで発言をしている人が多いのではないだろうか。あなたにも一度、深く考えてみてほしい。SNSで発言をする際に、相手の立場に立って考えてみたことはあるだろうか。その発言を聞いた相手の気持ちを考えたことがあるだろうか。あなたが軽い気持ちで発言したその言葉。面白半分で発言してみたそのとげとげしい言葉。それは相手を深く傷つけているかもしれない。

私は、このニュースを見てから意識していることが二つある。一つ目は、言葉を口にする前にその言葉を聞いた相手がどんな気持ちになるのかを考えることだ。思ったことを何でもすぐに口にするのではなく、一度相手の立場に立って考えてみる。自分にとっては何気ない言葉でも、相手にとっては傷つく悲しい言葉なのかもしれない。一度相手の立場に立ってみることで相手の気持ちを考えることができ、相手を傷つけないですむことが増えると思う。二つ目は、自分の行動に責任を持つことだ。人の言動は常に周りの人に影響をあたえている。良い影響をあたえる時もあるが、悪い影響をあたえ

る時もある。だからこそ、その自分の行動は正しいのかどうかを考え、自分の行動に責任を持つことが大切であると思う。

言葉は、人を楽しませたり、元気づけたり、幸せで明るい気持ちにすることができる。しかし、鋭いナイフのようにもなり、人の心を傷つけてしまうこともできる。そんなふうにならないために、一人一人が言葉を発する前に一度相手の立場に立って考えてみてほしい。そして、言葉を凶器ではなく、人を笑顔にさせるものとして使ってほしい。私は誹謗中傷というものが世の中からなくなってほしいと思う。

優秀賞

自立した女性になるには？

東京都・実践女子学園中学校一年 正木 二葉

今、私は、自立した女性を志しています。私は自立した女性になるために五つのことが必要であると考えます。

一つ目は、他人に流されない女性です。自分は何をすべきか、自分に適する方法は何なのか、他人の意見に左右されず、自分の思ったこと、感じたことをはっきりと言えるということです。そのためには、自分の意見に自信を持つことが大切だと考えます。自分の意見に自信がないと自分の意見を言えず、周りの意見にあわせてしまうからです。

二つ目は、責任感を持って発言する女性です。内容を考えず、発言してしまうことで相手を混乱させてしまうからです。責任感を持って発言するには、自分の意見を言うばかりではなく、他人の意見に耳を傾け、自分の発言に問題点がないか確かめることが必要だと考えます。

三つ目は、一つの意見にとらわれず、たくさん意見を持つ女性です。そのためには、さまざまなことを経験し、自分の知識を広げることが必要だと考えます。

四つ目は、はっきりとした目標を立て、達成のために、積極的に行動する女性です。そのためには、計画性を持ち、目標のためにはどのような努力が必要なのか、どのような行動をすればよいのか一日、一週間ごとに細かく、実行できる目標を立てることが必要だと考えます。

五つ目は判断力のある女性です。どのような状況においても物事を冷静に見つめ、正しい対応や判断ができることです。そのためには判断に必要な情報をこまめに確認することが必要だと考えます。正しい判断をするには根拠のある情報と、少しでも関わり合うものの情報を敏感に察知するということが必要だと考えたからです。また、決断することを恐れないということも必要だと考えます。失敗を恐れて、チャンスを逃がすよりは、思いきり失敗してその経験を糧にした方が良く考えたからです。

私が、自立した女性という志を叶えるために明日に向かって心に決めたことは、人への気配り、はっきりとした目標を立てること

です。はっきりとした目標とは、例えば小テストで満点をとる。期末で赤点にならないなどです。

私がなぜ自立した女性になりたいのかというと自分の力で考えられるようになりたいからです。自分で考えなくても、人に聞いたり、インターネットですぐに調べることができます。しかし、私は自分の意見をしっかりと持っていない人間がロボットなどにおとっしうと考えたからです。また、自分で生きていける力がほしいからです。将来一人暮らしをしたときなど、一人でできないといけない場面がたくさんあります。そのため、できるようになったのです。

私は、自立した女性になり社会に貢献できるような人になれるようこのようなことを心がけていきたいと思います。

佳作

私が心に決めたこと

東京都・実践女子学園高等学校一年 井出 寿

私は、小さい頃から人のために何かできる仕事につくことが夢だった。私は今年高校一年生になり、これからの将来や進路について考える時間がとても多くなった。

「人を助けたり人のために何かできる仕事」私は人のためになれる仕事といったら、『看護師』『医者』のイメージがとても強い。しかし、あまり人を助けるイメージのない管理栄養士などの職業でも、

糖尿病の患者のメニューなどを考えて、人を助けている人もいることを知ってとても驚いた。一つの職業でもたくさんの人をいろいろな方法で助けることができるんだと改めて感じた。

私は最近「虐待」という言葉をニュースでよく耳にする。「虐待」で年間一三九四人の子供たちが被害をうけていることを知った。そんな行き場のない子供たちの世話や相談にのる「児童指導員」という職業があることを友達から教えてもらい、私は初めて自分からの職業をやってみたいと思った。私は小さい頃から泣き虫で学校にも一人で行けないことが多かった。そんな私を先生や家族などいろいろな人たちが支えてくれた。私は家族がいて、何か相談したいことがあれば、頼れる人がいることはあたり前だと思っていた。でも「虐待」をうけていて「養護施設」などに入っている人は、家族がいることはあたり前ではない。そんな子供たちの小さな悩みなどを聞ける「児童指導員」はとてもかっこいい職業だと思った。私も、「虐待」という問題に「児童指導員」として関わってみたいと思った。しかし、人を助けることはそんな簡単なことではない。そう思ったある出来事があった。

その日は、とても真夏の日だった。部活の活動時間は六時間。席にすわりたくても満員電車で一席も空いていない。電車内はとても涼しく、あまりの眠たさに負けてしまい、立ちながら爆睡してしまった。数分後、私は誰かにおこされたような気がしてとびおきた。目の前には私とは肌の色もちがう男性が立っていた。私は何がおこっているのか分からなかった。日本語をうまく話せないのに、病気で

もなく、体調が悪いわけでもない私に、

「セキ…スワリ…マスカ」

と笑顔で声をかけてくれた。私がもし、その席にすわっていても席をかわっていなかったと思う。私は人の目を気にしてしまい、電車で席をかわってあげたくてもなかなかいいだせない。かわっても断られるのがこわくてこれまでで何回も見えて見ぬふりをしてしまっていた。私は、人目などをまったく気にせず、日本語もあやふやなのに声をかけて必死に伝えようとしてくれた外国人の方がとてもかっこよく見えた。私は小さい頃から人を助ける仕事をするのが夢だったが、この日から少し変わった。口で言っているも目の前で困っている人がいたら助けられないと意味がないことを改めて感じた。私は人目を気にせず、あたりまえのように人を助けられる人になりたいと思う。

佳作

努力

岐阜県恵那市立岩邑中学校一年

阪上 天心奏

『青年海外協力隊』。それが私の夢だ。

保育園の年中の時、クラスに障がいを持った子がいた。給食の時、近くの子はその子の世話をする事になっていた。準備をしてあげて困っているようだったら助ける。そんな簡単な世話だったが、私は

それがすごくイヤだった。

「障がい者はめんどくさい」

私の中で、そんな意識があったのだと思う。

その子は卒園と同時期に転校。罪悪感から私は障がいについて意欲的に学んだ。

学ぶにつれて私は、保育園の時持っていた意識がひどいものだと気づいた。そしてそれが「偏見」だと気づいた。私は顔を上げ、辺りを見わたした。人種差別、障がい者差別。辺りは差別や偏見ばかりだった。そして、差別や偏見によって苦しめられ傷つく人々を見た。少し前のアメリカで移民問題が発生した。国を追われ、仕方なくアメリカにきた家族がいた。不法入国者として、国に返されそうになって、「せめてお腹を空かせた幼い子供だけでも助けて欲しい」と懇願していた。しかし、結果的に誰もアメリカには入れてもらえなかった。

そんな様子をテレビを通してだが、私はこの目で見た。

「私より、小さな子が苦しんでいる」

ふと、口からこの言葉が出た。

助けたい、と思った。だから、小学生なりにできる事をやって。ユニセフの募金袋にお金を入れた。一人でも助かる事を祈って。

そんな時、『青年海外協力隊』を知った。これだ、と思った。その地に行って人を助ける事ができる。すばらしいと思った。私もなりたいと思った。

では、何をすべきか。じつくりと考えてみた。海外に行くのだから

ら言葉が必要だ。

「英語か」

私は頭をかかえた。私は英語がとてつもなく苦手だった。読めないし、かけない。あきらめようと思った。「英語ができない」それだけで。

しばらくして、私の中でだれかが言った。「自分より小さな子が苦しんでいるのに自分は何もしないんだな」

その声で分かった。私はころんだまま、動いていないんだと。私は起き上がって進んだ。どんな困難がまっていようと進もうと思った。

私は、少しでも英語が得意になりたいと努力した。英語の予習は母に英文にふりがなをつけてもらい何度も何度も読んだ。ただ、努力した。

私は英語が苦手ではなくなった。

私は、進んでいる。夢に向かって進んでいる。夢は、ずっとずっと向こうかもしれない。私はしよせん、小さな力なのかもしれない。それでも私は進む。夢に向かって進む。私は努力をし続ける。

私の夢は、『青年海外協力隊』。

小さな命に向き合う

東京都・実践女子学園中学校二年 佐々木 彩奈^{ささき あやな}

以前、家族と保護猫の譲渡会会場へ行った際、保健所で殺処分された猫の写真があり、皮膚がえぐれてしまったり、殺された後の白骨の様子を見てとてもショックを受けました。子猫から成猫までもがガス室に入れられてしまうことを知り、幸せになるために生まれてきたのに、人間の身勝手な理由で殺処分される運命にあつてしまっているひどいと思いました。殺された猫の中には、人に飼われ、その後捨てられた猫や、ペットショップで販売する目的で大量に繁殖され、売れ残った猫が含まれていました。この事実を知り、私の中に、社会的弱者の助けになりたい、力になりたいという感情がうまれました。それをきっかけに、テレビやインターネットでもそのような情報に積極的に触れる機会が多くなりました。調べると、世の中には私と同じ思いを持った人がたくさんおり、ボランティア活動として携わっていることもわかりました。

そのような思いが芽生えたとき、テレビで動物保護活動をしている獣医さんについて見ました。その人は、病院での治療に限らず、休みの日には遠方の動物保護をしている所へ行き、保護されている犬猫達にTNR活動の不妊去勢手術を行なっています。TNRとは(Trap／捕獲、Neuter／不妊去勢手術、Return／元の場所に戻す)

です。手術済みの印として、耳先をさくらの花びらのようにV字カットをします。それを実施することで繁殖を防止し、「地域の猫」として命を全うさせ、飼い主のいない猫に関わる苦情や殺処分の減少に寄与する活動です。

この放送を見て、獣医の資格を持つことで、このTNR活動や動物保護のボランティア活動の幅が広がることを知り、獣医師になることを心に決めました。

獣医師になるためには獣医学部のある大学へ進学しなければならず、そのために日々勉強を頑張っています。時間があれば、動物保護のボランティア活動にも参加しようと思っています。

私は獣医師の資格を取ったら、仕事と動物保護のボランティア活動を両立し、多くの動物の命を救うことで、弱い立場の動物たちが、虐待や殺処分などの、つらい目に合わないような明るい未来をつくる手助けになりたい。

この思いを忘れずに、これからの学生生活を送っていくことを決意しています。

佳作

心に痛みを持つ人を助ける(第二章)

東京都・実践女子学園中学校二年 鈴木 舞^{すずき まい}

「他人の気持ちを考えて思いやりを持つことができる人間になり

たい」

私は、昨年応募したエッセイの部で、いじめにあっている人、心を傷つけられた人を精神的に助ける仕事をしてみたいという自分の夢について語りました。

その後、一年が経ち、全く予想もしていなかった「新型コロナウイルス感染症の世界的流行」という社会問題が生じ、心を痛めています。

中学一年生の二月後半、日本では緊急事態宣言が出され、外出の自粛や学校が休校になるなど、今までの平穏な日常生活が突然制限され、中学二年生の新学期が二ヶ月遅れで始まる異例の学校再開。

その様な時、イギリスの学校に通う幼なじみが緊急帰国。イギリスでは、外出禁止令が国民に出され、厳しい行動制限がされる中、周りの人々が次々と新型コロナウイルスに感染し、毎日何百人もの人が亡くなる事態に恐怖心を持ち、心身共に病んで日本に帰国したそうです。

連日のニュースの中で、私の心に強く残ったのは、医療従事者やその家族や子供に対する偏見や差別、いじめや誹謗中傷です。

医療機関でコロナウイルス感染リスクと闘いながら使命感を持って働いている人に対して「医療従事者の子供はコロナウイルスに感染しているのではないか?」、「保育所等が医療従事者の子供の預かりを拒否する」という残念な報道。

また、感染が拡大している東京からPCR検査をした上で地方に帰省した人に対して、「皆の迷惑になるから、さっさと帰って下さ

い」というビラを玄関先に貼るという残念な報道もありました。「あの地域の人は皆感染しているのではないか」などといった偏見から、何も落ち度がないにも関わらず、差別や理不尽な誹謗中傷が行なわれているのであればそれによって心の痛みを受けた人に寄り添うだけではなく、もっと強く声を上げてそのような不正確な情報・デマを流してはいけない!と訴えることや、インターネットやSNSなどで相手の立場を十分に考えて投稿するためのルール作りをする!といった活動も必要なのではないでしょうか。

いじめのない社会を作りたい!というのが私の願いです。そのためには何ができるか? これからも自分が「志」とすべき仕事がある!何かを幅広く学んでいきたいと思っています。

佳作

ポジティブシンキング

東京都・白梅学園高等学校一年 谷島 菜月

この作文を書くにあたり、私はどんな女性になりたいのか考えてみました。そして、自分に自信を持てる強い女性になりたいと思いました。それは、自分の嫌な一面を変えたいという、自分自身への課題のようなものでありました。

私は、自分に自信を持つことが出来ませんでした。例えば、テニスです。私は小学生の頃から硬式テニスを習っていたこともあり、

中学校では女子ソフトテニス部に入学しました。硬式と軟式の違いはありましたが、テニスも体を動かすことも好きで、厳しい練習も苦になりませんでした。頑張ってた皆さん練習しました。でも、試合になると負けることが怖くて、緊張してしまい、なかなか良い結果を残すことができませんでした。今思うと、試合の前から気持ちが悪くてしまっていたのだと思います。もっと自分を信じて、強い気持ちで臨んでいたら、結果は違っていたのかも知れません。努力は裏切らないから。本当に、自分の自信のなさが、とても悔やまれます。そんな自分を変えたいと思っていました。

どうしたら、自信を持つことができるのでしょうか。自信とは、小さな成功体験の積み重ねだと、何かに書いてありました。たくさんの出来事が、自信を作っていくそうです。少し時間はかかるけれど、習慣や考え方を変えていくことで自信がついていくというのです。それを踏まえて、私は、何事も「やってみよう」という気持ちを持つようになりました。新しいことに挑戦するということは、尻込みすることもあるけれど、「大丈夫。私なら出来る」と前向きに考えるように努めています。そのせいか、少しずつポジティブに考えられるようになりました。悪いことばかり考えるのではなく、良いことを考えるのも大事だと思います。委員会活動、色々なコンクール、授業中の挙手発言、ランニング等。こうした小さな挑戦と達成感を積み重ねながら頑張ってきました。その結果、とても嬉しい出来事がありました。それは、中学校を卒業するときのことです。埼玉県産業教育振興会より勤労精励の表彰状を頂いたのです。正直

言って驚きましたが、頑張ってた良かったと思いました。挑戦したら、その分の結果が少しずつ積み重なっているのを実感しました。それが、自信に繋がるのだと思います。

あとは、精神面です。私は、努力すること、頑張ることは、あまり苦も無く出来るのですが、メンタルが弱いのです。メンタルを鍛えるには、ポジティブシンキングを心がけることが必要だと聞いたことがあります。つまりは、前でも述べましたが、習慣や考え方を変えていくことで自信がついていくということです。はじめは難しいかもしれませんが、なる自分を想像しながら、プラス思考を毎日繰り返し、習慣づけていこうと思います。

私は、自分に自信を持てる強い女性になりたいと思っています。それには、自分自身を変えていくことも大切ですが、色々な知識も身につけていく必要があると思っています。それは、勉強であったり、常識であったり、時事問題であったり、様々な情報です。一度に出来ることではありませんが、なりたい自分になれるように、志を持って少しずつでも努力していきたいと思っています。

第
18
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

一般の部

折れそう な心 いつも 喝いれる
母の付箋と 愛情弁当 堀永芽依 詠

折れそう な 心 にも 喝いれる
母の付箋と 愛情弁当

東京都国分寺市
堀永芽依

手料理を 振る舞う店を 開きたく
夫婦で待つは コロナの終焉 松下幸子 詠

手料理を 振る舞う店を 開きたく
夫婦で待つは コロナの終焉

埼玉県東松山市
松下幸子

寝がえりす 子もいつの日か みずからの
志す道 歩む日のくる 山本千晶 詠

寝がえりす 子もいつの日か みずからの
志す道 歩む日のくる

静岡県浜松市
山本千晶

「志」は私の「生きがい」

大阪府門真市

西山^{じやま}鈴華^{すずか}

「志」とは「生きがい」だ。それに向かって毎日行動し、考えることが楽しくて仕方がない。なぜ今日一日を生きる？なぜ私に明日が必要か？それは「志」を持つているからだ。そして私に毎日生きる活力を与えてくれている「志」は「すべての子どもに質の高い教育の機会を作ること」である。

私がこの「志」を持つきっかけとなったのは二〇一三年、私が中学生の時だ。当時、女性の英語の先生の旦那さんがガーナ出身の方ということで、ガーナの児童労働に関するビデオを授業内で視聴した。ビデオはガーナのある兄弟の話で、彼らは学校へ行きたいが貧困でそれがかなわず、他の子どもが学校へ行っているのを横目で見ながら力カオ農園で働くことを強いられている。厳しい労働環境の中でも兄弟は「パイロットになる」という志を持ちながら、しかし一生力カオ農園で働き続けなければならないことに絶望もしている。私は自分自身の「志」に向かって毎日行動することが好きなのに、「志」を追いかけることができない。環境に抗えない。彼らの涙が心に刺さった。なぜこのようなことが起きるのか？自分が彼らだったらどう思う気持ちになるのか？私はたまたま日本に生まれてきて学校で思う存分勉強できる環境においてもらっているだけであることを自

覚し、ではこのような子どもを減らすために何ができるだろうかと考え、教育の機会をすべての子どもに作りたいと強く思った。これが私の「志」になった。

私の「志」は、大きすぎると笑われることや、「無理でしょ」と言われることが多かった。しかし、何をもって否定されているのか、笑われているのか私には全く分からなかった。成し遂げたいという思いが強いため、人に笑われても何も気にならなかった。

大学の志望校を決める際に、世界を知らなければならぬと思った。そして留学制度が充実しており、英語が十分に学べる環境、加えて教員免許が取得できる大学に進学することを決めた。大学に入學すると、教員免許の取得を目指しながら留学へ行くために英語の勉強に力を入れた。そして長期留学のための英語のスコアを取ることで、私は留学へ行くチャンスを手に入れた。アメリカ、ドイツなどの欧米諸国、それともインドが留学地の選択肢にあり、私は大学から誰も派遣されることがない、インドに留学を決めた。親や友達からは猛反対を食らった。日本では、インドは危ない国だという認識がされているからだ。それに加えて、インド留学に一人で行くこと、これまで一人暮らしをしたことがなかったこと、そして海外経験が浅い中でインドはどうなのか、と心配の声の嵐だったが、それでも私の意思は変わらなかった。実際の状況を知らずに何も始まらないと思っていたからだ。

インドでは平日は現地の学校に通い国際関係学を学びながら、休日や長期休暇を使ってストリートチルドレンを集めた学校へのボラ

ンティア、マザーテレサが開いた施設でのボランティア、村の学校へ訪問をした。自ら学校に連絡をし、訪問させていただきたい旨を伝え、向かった。一人でも行動して、なにか困難なことがあったときは自分で解決策を導き出さなければならなかった。もちろん、これは自分の力だけで解決するという意味ではなく、周りの力を上手に借りるのも一つのテクニックだった。インドでの生活は、インド留学を選んだ明確な理由、それを支える「志」が無ければ、確実に心が折れていたなと思う。

街を歩いて初めて物乞いの子どもにお金を下さいと訴えかけられたとき、息が止まりそうになった。こういった光景は日本で見たことがなかったし、そもそも子どものホームレスを見たことがなかった。子どもが好きということもあり、とても胸が痛かった。私が今お金を渡しても、物事は何も変わらないというもどかしさ、そして自分の中での葛藤、やるせない気持ちで心が暗くなった。インドのことについて勉強したり、インドの状況を見たりするうちに貧困のサイクルは大きく、サイクルを止めることは本当に容易ではないことを身をもって感じ、私の無力さも同時に嫌というほど感じた。しかしそれと同時に、ストリートチルドレンが落ちている物で、工夫して遊んだりしているのを見てみると楽しそうだなと思ったり、私が彼らを勝手に悲観していたことに気づき、私は一体何様のつもりなんだと深く反省した。彼らは楽しそうだし、明るかった。

しかし不衛生、かつ危険なところで寝なければならなかったり、車がビュンビュン走っているところに出ていき、信号が赤になった

ら止まっている車の窓を叩き、物乞いをしなければならぬこと。快適なわけがない。子どもがそれを楽しんでいるわけがないはずである。しかし、彼らは背負っているものがある。彼らが学校へ行けばお金がかかるし、物乞いをして家族のためにお金を稼がなければならなかったり。ただ教育を受けられていない、だから彼らのために学校を作る、などという単純な話ではもちろんない。

八か月間のインド留学を終え、私は自分をもっと勉強しなければならぬことを自覚した。友達からの遊びの誘いも平気で断るようになった。時間の使い方、お金の使い方を考えなければ私の「志」は達成できない。そして、挑戦することのためになくなった。私には学ばなければならないことが沢山ある。それに向かって勉強をして、疑問をもって、考えて、本を読んで、話を聞いて、また考えて、そうやって「志」に向かっていく毎日が楽しくて仕方がない。

戴帽式

愛知県尾張旭市

浅野 憲治

式場の照明が消され、舞台が暗くなった。厳肅な雰囲気^{かみ}が醸^かし出され、咳^{せき}をする者もない。やがて舞台中央に一本のロウソクが灯された。明かりは、そのロウソク一本だけである。相変わらず舞台は暗く、席から舞台を見上げている者にとって、心細いようなロウソクの光であった。舞台上に黒い人影が登場したかと思うと、ロウソクに近づき、自分の持っている小さなロウソクに点火する。すべては静寂の中で進行している。一本のロウソクから点火された小さなロウソクの光が次第に増えていき、舞台全体がようやくほのかに薄明るくなった。百九十二本のロウソクの集団から、中央の小さなロウソクが舞台の前方に進むのが見える。その次の瞬間、そのロウソクにスポットライトが当たった。人影が舞台中央に浮かんでいるように見える。それが私の妻であった。

「私、看護師になるわ」と、五十歳になる妻が、突然、そう宣言した。長い間、看病していた両親を昨年相次いで見送ったこともあり、高校生の息子が大学進学を目指していることもあって、経済的には苦しくなるから、パート勤務ぐらいは仕方がないと思っていたが、いきなり看護師とは驚いた。看護師になるには年齢的な問題もあるだろうし、第一に二十五年あまりも専業主婦しかしたことがない妻が、

最も過酷な勤務だといわれる看護師をやっていける体力があるわけがない。それは両親が入院していた病院の看護師さんを見ていて充分に分かっているはずであるだろうし、憧^{あこが}れだけでなれるような楽な仕事ではないことは、私にも良く分かっていた。

「絶対に無理だし、世間に迷惑をかけるから」と、やめるように言っ
て、それっきり忘れていた。しかし、妻はあきらめてはいなかった。
私が会社に行って留守の間や寝てしまった夜間に、高校生の息子の
教科書や参考書を借り出し、勉強していたのである。分らない所
があると、現役の受験生である息子を家庭教師にして、教えを乞う
ていた。息子も母親に協力し、私には知れないように孝行息子を
演じていたようである。私を知ったのは、受験票が送られてきてか
らであった。ここまで勉強が進んでいて妻が真剣なら、私もあきら
めざるを得なくなり、我が家には二人の受験生がいると思うように
した。買い物、料理、洗濯など家事を手伝い、何時^{いつ}の間にか、看護
師受験の援助をしているようになってしまっていた。合格発表の日
は、会社での仕事も手につかず、ソワソワしながら電話を一日中待っ
ていたが、連絡はなかった。(さぞガツカリしているだろう。何と言っ
て慰めたら)と思いながら帰宅すると、

「合格した」

という。

「合格したのなら、なぜ連絡ぐらいいしないのか」と、うれしい夫婦喧嘩をしたものである。息子も志望校に合格し、その年は緊張したが嬉しい一年であった。

あれから三年、今日は戴帽式である。「誓いの詞」を読む特権を与えられた妻は、もう何日も前から、家族を前にして練習していた。凜とした声には張りがあり、落ちついてゐる。練習の時より、はるかに出来が良い。参列者の家族の中から、

「あの人、私より年上かもしれないわ」

という、ささやきが聞こえて来る。自分と同年代の中年女性が、自分の娘と同じ戴帽式に出ていることに、驚いている。しかし、この戴帽式で「誓いの詞」を読み上げているお前は、一番年齢が上だから選ばれたわけではないことを、私は知っている。毎日、午前二時、三時まで勉強し、試験の時は徹夜もしていた。記憶力の衰えは経験でカバーし、それは見ても心配になるくらい努力していた結果である。授業中、居眠りをするものが多い中、決して眠ることなくノートを取り、予習・復習した結果であることも私は知っている。だからテストはほとんど満点で、全国模試での順位も上位で「学校創立以来の成績だ」と、先生方も驚いていたという。看護実習では、患者さんから（師長さんと間違えられたと大笑いをしたこともあった）そうである。体育の時間は、さすがに息切れをして大変だったと告白された時は（さも、ありなん）と、同情したものである。二十代の娘さんたちと同じ条件で、本当に良く頑張ったと思う。

「……戴帽生百九十二名代表、浅野陽子」と、しめくくる。その声は、誇りと自信に満ちている。妻が、こんなに立派に社会活動が出来ることを、私は不覚にも、信じられないような気持ちで聞いていた。二十五年以上も連れ添っていて、初めて知る妻の顔である。所作も

立派に役割を終える。あのまま、私が断固反対していたら、妻の才能も夢も殺してしまっていたのではないかと、申し訳ない気持ちになる。家に帰ってきたら、あらためて褒めてやろう。

「今日は、立派だったよ」と。

優秀賞

おじさんの教員デビュー

千葉県千葉市 東島日出夫

今、大学の非常勤講師をしています。還暦を過ぎ、やっと夢が叶いました。

私は高校を卒業し、公務員として就職しました。勉強はあまり好きでなく、それでも高校は進学校に入ったものだから、つくづくのが大変でした。当然、成績は後ろから数えた方が早いですし、九割以上が進学希望のなか、就職と決めていた私は、浮いた存在となっていました。

就職により都会に出た私は、遊びにはまりました。当時、ディスコが大流行で、その楽しさを知った私は、毎晩ディスコに狂っていました。そのようなことが一年も続いたでしょうか。いかに楽しいとは言っても、次第に色褪せてくるものですね。飽きの気持ちと同時に、焦りの気持ちが頭をもたげてきたのです。果たして、このままでいいものかと。不思議なもので、あれ程嫌だった勉強

が、ここに来て無性にたくなってきました。ディスコ通いをきっぱりと止め、資格試験への挑戦を試みました。行政書士、そして社会保険労務士。何れも一発合格でした。特に社会保険労務士の受験に際しては、今まで生きてきた中で、一番勉強したと言っても過言ではありませんでした。平日帰宅後はもとより、土日一日中、机にへばりついていました。でも、^ゝ苦^ゝとは思いませんでした。不思議と楽しい。新しい知識をどんどん身に付けていけることが、^ゝ苦^ゝを^ゝ喜び^ゝに転じさせていくのです。^ゝ学ぶ^ゝって面白い、^ゝと思いはめるようになりました。

学ぶことの面白さ、楽しさを知った私は、この先どうするかを考えました。資格の取得もいけれど、一旦取得してしまえば、それを生業^{なりわい}としない限りは、それきり勉強することはありません。生涯^{なげわい}続けて、勉強していけるものを模索しました。考えついたのが、大学に行こうということでした。その考えの奥には、大学に進まなかったことのコンプレックスがあったのかもしれませんが。高校卒業後十年以上が経ち三十路になってから、その思いが募ってきたのです。いろいろと考えた結果、通信制大学に入学することを決めました。妻も一緒に入学しました。独習では、なかなか大変なこともありましたが、妻と励まし合いながら六年掛かりで何とか卒業することができました。

もっと勉強したい。自分の力量をも顧みず、大それた望みが膨^{ふく}らんできました。大学院に進み、更に知識を深めたいという。折しも社会人を対象とする夜間大学院が開設されることを知り、ダメ元で

願書を提出しました。そうしたら何と、奇跡も奇跡、合格することができたのです。嬉しかったですね。まさか、大学院生になれるなんて思ってもいませんでした。しかし、いざ始めてみると、仕事を持ちながらの学生生活は結構大変でした。それでも二年間、一日も休むことなく一生懸命となって通いました。大変だったけれど、充実していました。無事修了することができ、改めてこれから先の進路を考えました。これまでは、^ゝ教わる^ゝという受け身の立場でしたが、ここに来て^ゝ教える^ゝという立場を意識するようになりました。そして決意したのです。博士課程に進み、大学教員の道を志そうと。これまで、いろいろな人から教えてもらい、育ててもらって、学ぶ喜びを知り、自分はここまで来ることができた。今度は、その恩返しとして、これまで得た知識を社会に還元し、一人でも多くの人に学ぶ喜びを知ってもらえたらという気持ちで湧いてきたのです。思い切って後期課程に挑戦しました。入学試験はなお大変でしたが、合格することができ、三年間、仕事を持ちながら勉強を続けました。苦しかったけれど諦めない。どうしても教員になって、若い世代を育てたい。その一心で歯を食いしばって頑張ってきました。しかし、後期課程を修了しても、すぐに教員への道が保証されるほど甘くはありませんでした。業績や年齢的なことがネックとなって、容易には見つかりませんでした。還暦も過ぎ、半ば諦めかけていた昨年、遂に非常勤講師への声が掛かったのです。正直言って嬉しかったです。迷わず受ける決意をしました。本年四月、本来であれば教壇に立ち、というところでしたが、コロナ禍のため対面授業ができ

なくなり、遠隔による授業を余儀なくされました。結局、前期は学生達と一度も顔を合わせることなく終了しました。とても残念でしたが、「わかり易い内容だった」とか、「社会に出た時役立つと思うので、よかった」などの温かい感想に、目頭がジーンと熱くなり、諦めることなく志を持ち続けてよかったな、とつくづく思いました。教員冥利に尽きますね。

私の志、それは学問を通して若い世代を育て、もって社会のために尽くすこと。新米のおじさん（おじいさん？）教員ですが、この熱い熱い思いは、若い先生方には負けません。

優秀賞

先の見えない時代を生き抜く教師として

岐阜県恵那市 遠山 直美 とのおやま なおみ

「全国一斉臨時休業を要請します。」二月二十七日夕方、帰宅途中の車の中で耳にしたニュース。話しているのは、安倍首相。突然飛び込んだきたニュースから、誰も経験したことのないコロナ禍の学校が始まった。

私は、落ちていて頭を整理した。三月二日からの休業要請ということは、学校に残された時間は、わずか一日。明日から本格的に卒業式の練習という時期だっただけに、残された一日を生徒のために

何をするのが最善なのかを考えた。

二月二十八日朝、凍てつく冬の空気が私の心を引き締めた。三年生の学年主任は、普段になくスーツを着ていた。各々の教員が、最後の一日を覚悟していた。教務主任の私は、校長の指導の下、時間割を変更した。三年生の生徒が、過ごすはずであった五日間を一日に凝縮した学活。在校生と卒業生の別れの時間として、感染防止対策を行なった上で卒業式の総練習を組み込んだ。卒業生は、在校生に感謝を告げ、在校生は、先輩の姿を目に焼き付けた。まさかこんな形で突然の別れを告げなければならないのかと何にぶついたらよいのかわからない悔しさがこみ上げてきた。しかし、玄関から花道を作り卒業生を涙ながらに送り出す在校生の様子を見て、生徒達も、教職員も、今できることは何かを考え、猶予なく決断し、最善を尽くしたのだと思えた。

三月五日は、コロナの恐怖を感じさせないほど穏やかな卒業式だった。

しかし、学校に生徒不在の状況は続いた。三月中は、見えない敵、コロナから生徒を守るためには、この休業もやむを得ないと思えた。しかし、四月の休業延長は、一気に私の緊張感を高めた。コロナ感染者の数も増えつつある恐怖に加え、学校という場での全ての生徒の学びが成立しなくなるという、今まで誰も経験したことのない不安。新たな担任との関係も作れない中で、学校に来られない生徒の学びを進めなければならぬという焦り^{あせ}。かろうじて生徒の手元に配付することができた教科書を頼りに、学習の仕方を丁寧に書き添

えたプリントをすることで何とか学習を進めた。昨年度までの授業の中で、生徒に付けてきた学ぶ力を信じて。

四月中頃、恵那市教育委員会から、ケーブルテレビでの動画授業の配信が可能になったとの知らせ。カメラに向かって授業をすることに一瞬のためらいを感じたが、こんな時だからこそ、佐藤一斎先生の教えが心の支えになるのではないかと動画番組づくりに手を挙げた。言志晩録六十条から、学校に行けない今、家庭で過ごす全てのことが学びであること。今の学びは、きっと将来につながるとメッセージを込めた番組を作った。このことがきっかけとなり、四月新しいメンバーで始まった教員集団がまとまり始めてきた。動画授業を配信することにも前向きになり、互いの授業を撮り合い、生徒に向けて配信した。動画授業作りは、対面授業よりも格段に準備の時間がかかったが、生徒の学びのためだと思えば苦ではなかった。テレビ会議システムを使い、朝の会も始めた。目の前にいない生徒の学びを止めてはならないという思いでいっぱいだった。

日々刻々と変わっていく状況に、立てては消えていく行事計画。前年度通りにならないことばかりの生活の中、ふと、下田歌子先生の顔が頭をよぎった。歌子先生が生きた江戸末期から昭和初期は、政治が根底から覆^{くつがえ}され、社会や文化、人々の暮らしも大きく変わった時代であった。強い志を抱いた、英国への留学。そこで学んだことを基に、女子教育の重要性を訴え、自ら学校を作るという実践力。先行きの見えない時代に、先を見通し、女性の地位向上を目指して力強く生き抜いた歌子先生は、今の時代をどう見ているだろうか。

どんなに、予測困難な時代であっても、将来をつくる子どもたちは、どのように育ってほしいのか。どんな社会をつくる人になってほしいのかを描くことで、やるべきことが見えてくるはずだと歌子先生の声が聞こえてきそう。改めてコロナ社会に立ち向かいながら私は、教師としてどのように生きていきたいのかを考えた。

私は、縁あって恵那に嫁ぎ、豊かな自然や歴史ある地域、継承されてきた文化の中でわが子を育て、地域を何とかして活性化させていきたいと願う人々のエネルギーに触れて、教師として勤めている。そして、恵那で暮らせることに幸せを感じている。私は、恵那の子ども達が、将来にわたって、恵那を誇りに思い、ふるさどである自分の地域づくりの担い手となる力を付けたいと強く思っている。

コロナ禍で、できなくなったことはたくさんある。しかしできないと諦めるのではなく、できる方法を考える。誰も正解がわからないこの社会の中で、自分なりに良いと思う方法で前に進むしかないのである。三密回避で、人との距離をとりながらの生活。それでも、学校のためにと汗を流す方々と接する。こういう社会だからこそ、人とのつながりを大切にして、恵那を愛する子どもを育てる教師になりたい。

日本一の「版画のあるまち」へ

岐阜県恵那市 市川彰いちかわ あきひろ

今年の二月七日、雪の新青森駅に降り立った私を、棟方志功むなかたしこうの「二菩薩釈迦十大弟子」が迎えてくれた。青森のまちに鎮座するかのようなその姿は圧倒的であった。私は幸運にも、「あおもり版画年賀状グランプリ」の第一回グランプリ賞をいただき、青森に来たのだった。その夜泊まった浅虫温泉の「椿館」でも数多くの棟方作品に出会えた。

翌日の表彰式は、版画喫茶の一角で行なわれ、実行委員長である関野準一郎おおいちの甥御さんから表彰状をいただいた。青森はまさに「版画のまち」で、棟方志功記念館はもとより、商店街のウィンドウが版画ギャラリーとなり、客室全てに関野準一郎作品が飾られてあるホテルもある。棟方志功、関野準一郎と言う、郷土の作家を敬愛し、彼らだけでなく「版画」を大切に思う思いが街中にあふれているのだ。

実は棟方志功が疎開していた富山県福光市の版画年賀状コンクールでも「となみ民藝協会賞」を頂き表彰式に出席した。最優秀賞は三人のお子さんと一緒に応募したというお母さんだった。後援には、公的機関や多くの報道機関などの他、地元のお菓子メーカーや企業が名を連ねており、副賞として並んでいたお菓子の詰め合わせは魅

力的であった。また、優秀作品が地元の絵画サークルの方たちにより縦六m×横三mもの大作に描かれて展示されていた。後で道の駅の「南栃ななとちふくみつ雪あかり祭り」で大きな風船に仕立てて砺波とぎな平野の空高く飛ばすのだと聞いて驚いたが、後日私の作品もその一面を飾って空に上げてもらったと聞いて感無量であった。街中の多くの人々の暮らしの中に版画が生きているのだと感じる出来事だった。棟方志功に縁のある町の二つの賞をいただいたのだが、この時から「版画のあるまち」というフレーズが私の頭の中に拡がり離れなくなった。そんな版画を愛する人々の志に出会い、私は我が故郷恵那を思わずにはいられなかった。

恵那地方は昔から、版画教育が根付いており、小学校でも中学校でも木版画の授業があつて、自画像を彫ったことが心に残っている。息子たちが版画にどんな思いを持っていたか残念なことに聞いているが、彼らが学校で使っていた彫刻刀を私は今でも愛用している。世代を越え、この地域に版画が生きづいている一つの証あかしと言つては大げさだろうか。

私自身は趣味で版画を集めていたが、やはりそれではあきたらず、地域の版画サークルに所属して、毎年作品展に出品するようになった。その後、日本板画院の公募展に出品して賞を頂いたり、いくつかの会にも所属して、版画は私にとって生活の中心と言っても良い存在である。

恵那市には、駅前通りに浮世絵版画を展示する「中山道広重美術館」が二〇〇二年に設立され、同館主催の「こども版画コンクール」

は既に十六回を数える。このコンクールは小中学生の作品三〇〇〇弱の応募があり、私も審査員の一人として携わってきた。私は、日本一の子ども版画のコンクールではないかと思っている。子どもの作品には、何ものにもとらわれない自由奔放な魅力があり、素晴らしい版画作品に出会う審査の仕事は毎年の楽しみだと言える。私は自分が生まれ、育ったこの恵那の地をとっても大切に思っている。小中学校で習った版画は、生活の中にあり、私のライフワークだ。青森市、福光市、県内では高山市など版画が人々の暮らしに結び付いている町を訪れ、私に一つの思いが育っていった。

長年にわたる版画教育という素地があり、「中山道広重美術館」という核となり得る施設があり、何よりも人々の心を潤す豊かな自然と歴史ある古い街並みが私たちを包んでいる。この町を『版画のあるまち』にしたい!』というものだ。

幸いにもこの思いに賛同していただける方々との出会いがあり、企画懇談会を立ち上げることができた。歩みはゆっくりだが、市の美術展に新しく版画の部が創設され、駅前に版画の看板が設置された。新型コロナウイルスの中で、私の版画の市民講座をケーブルテレビで放映していただいた。少しずつだが、版画のワークショップなども継続して実施している。私の尊敬する郷土の偉人佐藤一斎の「言志四録」をわかりやすく、理解しやすいように超訳した「版画かるた」の作成にも取りかかった。

私の「志」は、私の大切な故郷を、大人も子どもも版画と向い合って取り組める日本一の「版画のあるまち」にすることだ。もちろん

一版画家として棟方志功のように作品制作にも情熱を持って真摯に取り組んでいきたい。

佐藤一斎「言志四録」に「真に大志ある者は、克く小物を勤め、また真に遠慮ある者は、細事を忽にせず」(言志録二十七条)(「訳文」人間の本当の正しさは、小事における行ないに表れるものである)とある。私も恵那を「版画のあるまち」にするために大きな夢を持ち、志を持って、日々の小さなことに一生懸命に取り組んでいきたい。

佳作

おまけの時間をもらうまで

京都府宇治市 小野利子

昭和五、六十年ごろ私は、K病院の小児科病棟で看護師として働いていた。次々と抗がん剤が開発され、がんにたいする薬物治療がすさまじい勢いで進んでいた時代である。

この治療は、がん細胞を死滅させるのが目的であるが、健康な細胞にも大きなダメージを与える。と、同時に強い副作用を伴う厳しい治療であった。現在と違って、当時は、副作用を和らげる薬は少なく、ただひたすら我慢を強い、のり越えてもらうしか方法がなかった。それでも治ってほしい一念で医療者も家族もその治療を病める子に受けてもらっていたのだ。

しかし、どんな薬を使っても、消えていく幼い命があり、やりき

れない無力感に苛まれた。そんなときは、世俗で価値あるものと思っていたものが、急速に色あせ、崩れて私のなかから消えていくのがはつきりとわかった。

平成に入って、勤務部署の交代時期がやってきた。婦人科病棟で働くことにする。男性に対して苦意識があったからかもしれないが、やはりがんの治療を希望して、この病院に來られるお母さんたちのことが気になった。

小児科で、子を無くした母親を何人も見たせいか、今度は母を亡くす子が少なくてすむようにとの願いがあったように思う。

しかし、ここでも、懸命に治ろうとする人の意思を踏みにじるようにして死は、つぎつぎにやってくる。幼い子を残して逝かれるお母さんの無念さを目のあたりにするとき、制御しきれず涙が流れる。生きよう、生きたいと強い意志を持って治療に挑まれる人たちを見ているうちに、もし、この先、私の命が続くならば八十歳までは、何でもいいから人のために役に立つ生き方をしようと思うようになっていた。

それは、子を失うこともなく、苦しい治療の末に子を残して逝くということもないまま、生きながらえる私の使命のように思えた。六十歳で定年退職をする。その後は請われるままに老人福祉施設の医務室で働く。

七十歳になったある日、隣町に住んでいる娘が二人の幼稚園児をおいて看護専門学校にいき資格をとりたいたいという。私は諸手を挙げて賛成した。即刻、施設の医務室を退職し、夫とともに孫の迎え

と、夕食作りを手伝うことにした。いつも留守番役に廻っていた夫も、これなら一緒に出来る。力を合わせて娘家族の手助けが出来る喜び、孫たちと共に過ごす貴重な時間もさることながら、私にとつてなによりも喜ばしく思えたのは、仕残してきたかもしれない看護の仕事で娘が引き継いでやってくれるのではないだろうかと思えたからだ。

看護専門学校の三年間は、またたくまに過ぎた。夫はこれを機に家に止まることにしたが、しかし、私は娘が看護師として働き始めても手伝いを止めることはしなかった。

職場にいる間は家のことを気にせず、しっかり患者さんと向き合って欲しい。そんな思いと、折々に、「心がそこに無いような看護は相手に何も伝わらず、哀しませるだけではないだろうか」などと話し合える仲になったことに満足しつつ、通っていた。

いつしか、幼稚園児だった孫の一人は大学生になり下宿生活を始める。

「もう、そろそろ、いいね」と思った今年の春、新型コロナウイルスの世界的流行によって、自粛生活を余儀なくされる。こうして、手伝いに行くことを止めた私は、いつのまにか八十三歳になっていた。私の人生に深く関わってくれた亡き小児科の子供たちの分も、子供を残して早く逝きすぎた若いお母さんたちの分も生きさせてもらったような気がして、私は肩の荷をゆっくり降ろした。

——これから先は、あなたにあげるおまけの時間。いつまで続くか

わからないけど、

「ハイ、もう、おしまいね」

と言われるまで、好きなように使って――。

誰に言われた訳でもないが私は今、どこか老後の匂いにするおまけの時間を過ごしている。しかし、遠からず「もう、そろそろおしまい……」と告げられるだろう。

そうと思えば、一日一日が大切に思える。今のうちにやりたいことを早くやらねばと、ついつい焦ったりもするが、そんなときは、おまけとしてもらった時間なのに、あつかましくも貪欲過ぎると反省もする。与えてもらったと思えば、ときに感謝の気持ちも出てきて、夫にも、周りにも優しくなれるような気が――する。そうは言っても苦しいときは苦しいし、辛いときは辛いものだ。そんなときは、少しわがままに過ごして、気持ちが収まればまた、与えられたおまけの時間だと自分に言い聞かせつつ楽しんだり、喜んだり、感謝したりしながら、今、生きている。

佳作

己に課した約束

山口県下関市

河田 豊子^{かわた とよこ}

その頃、我が家は空中分解寸前だった。夫は転職を繰り返し、家

の中では愚痴ばかりをこぼしていた。私は専業主婦だった。

そんな家の中で、子供の教育がすんなりいくはずもなからう。中学二年になった娘も、夫と同じようにうまくいかない全てを人のせいにして不登校に突入した。

家族三人で、物事のうまくいかないのはお互いのせい、と言いい、家の中は出口の見えない暗いトンネルの中を行ったり来たりしているような重苦しい毎日であった。

そんな何もできない夫と別れるのは簡単だった。何もかも投げ出して逃げ出すことは簡単だ。それは当時の私の本音だった。だが、それで、その先どうなるというのだ。私は踏ん張ることにした。実際のところ、夫はともかく、私は娘に人間どう生きていくべきか、見せねばと思った。

私は私自身への約束をした。愚痴を言わないこと、うまくいかないといって人のせい、夫のせいにしないことだった。何に対してもぐつと我慢、チャレンジだった。

娘が中学を終えたら、私は再就職をしようと思っていたが、まわりのもろもろのことを考えその計画を前倒しした。

結婚前は事務職に就いていた。が、私はずっと好きで学び続けていた英語学習の結果を生かすためにも、児童英語塾の講師になった。赴いたその初日に、ある生徒の母親に「自分は人を見る目があるから」と、さも、私はその器ではないようなことを言われた。出鼻をくじかれた。しかし、心に決めたことをそう簡単に断念するわけにはいかなかった。第一、生活がかかっていた。

私はその仕事を始めて五年目のことだった。夫が失職した。それまでも転職を繰り返していた夫だ。私にとっては別に天地がひっくりかえるようなことではなかった。自分でも思う。なぜか「もう夫に会社勤めをしてもらうのはやめよう」と思ってしまった。

それまでの私の人生において、そんな気持ちは一度もなかった。怒りもなかった。憤りも、悲しさもなかった。私はそんなに冷静だった。ただ「この危機に対して私は何ができるのだろう」と考えた。

そして、一大決心をした。

「私が英語塾を開いて家族を養おう！」

第二のチャレンジだった。本気で、私はそれが可能だと思っていた。夫が人の下でうまく仕事をしていけないのなら、私が何とかしないといけないと思った。

夫はもともと高校教師の免許を持っている。良い方向にものごとは動き出した。夫が主に教えるということで塾は軌道にのっていった。

あれから四半世紀経った。私は今年七十三歳になった。友人たちは随分前から「孫の世話に忙しい」とか、何かのレッスンに通っているとか、とにかく悠々自適に過ごしているようだ。私は世間でいう定年退職の年とはとくに過ぎたが、多くの興味深い人たちに囲まれ様々なことを経験しながら、自分が選んだ職、今では、天職と考える仕事を楽しんでいる。

「天は自ら助くるものを助く」というのは本当だと思う。一つクリアーしたら、次の問題も己の力で何とか解決するという力もつい

た。人のせいにしないということは人を頼らない、と言うこともある。独立心が身についた。

そして、様々なことが未来に向けて開けていった。私自身に自信がついたということなのだろうか。

六十歳を目前に大学院を修了した。そして、自分がそこで学んだこと、仕事から学んだことを技術として後輩を指導したい、と己が学んだ大学に自分自身を売り込んだ。

そして、昨年、大学のキャンパスが私の出向いていた町から撤退するまでの十二年間を大学ゼミの英語講師として過ごした。

我が家はこうして空中分解を免れた。結局、どんな試練があつたとしても、人のせいにすることなくコツコツと前向きに頑張っていれば、自ずと道は開けてくるものだと思う。簡単に物事をあきらめてはならない、とも思う。

夫ももともと好きで選んだ教鞭を執る、という仕事に幸せを感じているようだ。私たちは危機を乗り越えた分、何でも喋る、話し合える家族になった。

今、夫と言っている。「我が家は豊かだよ。何でもある」裕福ではないが心は豊かだ。

夫は私が必死の思いで課した己自身へのチャレンジ、私がどんな気持ちだったかなぞ知りもしない。

骨髄ドナーとなる

愛知県名古屋市長

竹本 義昭
たけもと よしあき

私は、大学病院の手術室のベッドの上に、数人の医師、看護師の方々が見守る中、全身麻酔の注射を終え仰向けになっていた。結婚二十年目。妻子との日常生活、職場ではベテランの域に入り、公私に充実した日々を送っていた。薄れ行く意識の中で、骨髄バンクに登録し、骨髄ドナーになるまでの出来事を思い起していた。

◇登録手続◇

私が骨髄バンクに登録したのは骨髄ドナー手術の約十年前。妻と共に献血センターにまだ幼かった子を連れて毎月のように成分献血をしていた頃だった。ある日、献血センターで骨髄ドナー登録の募集をしていた。私は骨髄ドナーについてよく知らないまま、困っている方のお力になれるならと気軽に応募したのである。しかし、この気軽な選択が、後に人生最大の決断を迫られることとなった。

◇ドナー候補者◇

登録が終わると骨髄バンクでは登録者がドナー手術を必要とされる患者さんと白血球のHLA型が適合するかを探し、適合者をドナー候補者とする。ところが、骨髄提供者と患者さんのHLA型の

適合率は非血縁者の場合は数百万から数万分の一とされ、極めて低い割合なのである。したがって、ドナー登録をしてもドナー候補者とならない方も多くおられ、現に私の妻も今まで一度もドナー候補者になっていない。ところが私は、何と三度もドナー候補者となったのである。

◇コーディネーターとの問診・説明◇

ドナー候補者に選出されると、コーディネーターから連絡があり、各種検査とコーディネーターによる問診・説明が行なわれる。コーディネーターはその説明において、まず、ドナー手術のリスクについて説明をする。具体的にはドナー手術における死亡例や後遺症例の説明である。その後、ドナー候補者は自分と家族の意思を確認し、ドナーとなることが困難な場合は骨髄ドナーとなることを断ることができるのである。そのため、ドナー候補者は常に複数選出される。私は最初のときは第三候補であったため、初回面談のみで終了した。二回目は次点候補であったが、第一候補の方が最終同意をされたため私のコーディネーターは最終意思確認手前で終了した。

◇最終同意◇

三回目の候補者となったとき初回面談で、コーディネーターから次点候補とも第三候補であるとも説明されなかった。私は自分が第一候補者であることを認識した。これまでの二度のドナー候補としての経験から骨髄ドナーになることがどういふことかは十分にわ

かっていた。日本の骨髄バンクにおいてはドナー手術での死亡例はないが、術後に腰痛、手足のしびれなどの健康被害の発生は事例があり、その割合は約〇・八%程度である。この説明を聴き、皆さんはどのようにお考えであろうか。死亡することではなく、健康被害も千人のうち八人程度だから大丈夫と思えるであろうか。私は、今まで通りの生活、仕事が術後も続けられるのか、という不安な気持ちが頭から離れなかった。

◇決意／志を達成するには◇

最終同意は本人及び家族の同意が必要となる。そして、最終同意をするの撤回はできない。これは、患者さんが移植二週間前から移植準備のため大量の抗がん剤投与などによる前処置に入られるためである。すなわち、患者さんの命にかかわるのである。最終同意面談前日に妻に気持ちを尋ねると妻は、「あなたは多くの登録者がHLA型が一致せずドナー候補にならないのに三回も選ばれ、正に骨髄ドナーとして選ばれた人と思う」「知り合いにも白血病の方がいる。あなたがドナーとなることにより助けられる命があるのではない？」と。妻の言葉を聴き、私は骨髄ドナーとしての使命感を感じ、論語為政の「義を見てせざるは勇なきなり」の言葉を思い起こした。骨髄ドナーとなることは人として当然すべきことである。それをしていないのは勇気がないのである。約十年前骨髄バンクに登録したのは、困っている方のお力になれるならという素朴な気持ちであった。志を遂げるにはリスクはつきものである。私は、困っている方のお力

になりたい、と心から思った。翌日、私と妻は迷うことなく最終同意をした。

◇これからの志◇

私はドナー手術を終えて約二か月経った頃患者さんからお手紙をいただいた。そのお手紙には骨髄移植手術が成功し、患者さんがご家族と共に生活できるようになったこと、ご家族と患者さんの感謝の言葉が綴られていた。私はお力になったことが素直に嬉しかった。ただ、私の志にはまだ続きがある。五十五歳を超え、骨髄バンクは退会となったが、未だ成分献血にはほぼ毎月通っている。私は健康な身体を維持する努力を続け、可能な限り献血を通じて輸血を必要とされている方のお力となる。これが今の私の志である。

佳作

草原の若者にエールを

愛知県稲沢市 菱川町子
ひしかわ まちこ

モンゴルに日本語教師として着任し、学生の前に立った日、食べるように私を見つめる目に圧倒された。その目は日本語を学びたいという、エネルギーとなって怒涛（どとう）のように私めがけて押し寄せて来た。

そのエネルギーは学級崩壊の嵐の中で、燃え尽きたはずの教師の

燃えがらに、風を吹き込んだ。消えたはずの灰の中から小さな炎が生き返った。もう二度と人を教える事はすまいと決めたはずなのに、日本語教師養成講座の門を叩いてしまったのは、消えてしまったものに未練があったのだろうか。

その頃モンゴルでは、社会主義が崩壊し自由経済に移行したばかりで、経済を立て直すのに必死であった。海外青年協力隊などの、技術協力や援助で、若者は日本の先進技術を身につけ、国を發展させる熱意に燃えていた。そんな彼らにとって日本に留学することが夢だった。

「私は日本に行つて先進技術を勉強し、国の發展の力になりたいです」

「僕は日本に留学し、知識を生かして社長になり、父や母に恩を返したいです」

瞳を輝かせて言う草原の若者の言葉は、まるで明治にタイムスリップしたようだ。

——志を果たして いつの日にか帰らん——

「故郷」の歌の世界がここにあった。私は彼らの日本に行きたいと言う夢に、本気で向き合おうと思った。

半年も経った頃、彼らの夢を叶える手掛かりを見つけた。それは日本語スピーチコンテストに優勝することだ。副賞として日本に招待されるからだ。これだ。招待なら飛行機代、滞在費などは全て日本が負担する。日本人家庭にホームステイもできる。日本の文化、生活習慣など直接見て、触れて味わう体験は、日本語を学ぶ絶好の

機会となるだろう。

さっそく希望者を募りスピーチコンテストに送り込んだが、結果は惨憺たるものだった。当然だ。モンゴル代表を選ぶ訳だから、付け焼刃でできるはずもなかった。

そもそも私は、スピーチなど今までやったことがないし、指導したこともなく何をどうすればよいのかさっぱりわからなかった。優勝するためにはまず、スピーチとはどういうものか、私自身が勉強する事から始めなければならなかった。

スピーチは言葉を音声にして、人の心に直接働きかけるものだ。テーマの論理性も大切だが、単なる朗読ではなく、劇のようにセリフ、身振り、表情など体全部を使って表現するものなのだ。そして自分が心から思っている事でなければ、聞き手の心に届かない。

そこで私は、彼らの体験から生まれた生の声を引き出すために、原稿を書く前に徹底的に話し合うことにした。テーマについて一時間、二時間、時には二日がかりのこともあった。原稿を添削するのが私のすべきことではなく、彼らの体験をテーマと結び付け深めることが大切なのだ。

このやり方で、二位入賞。だが優勝でなければ日本に行けない。学生のがっかりした顔を見るのは辛かった。

死別した父の想い出や、死線をさまよった交通事故など、話したくない事でも優勝のためあえて挑戦した学生も少なからずいた。

「これはインパクトのある話だね。だけど話すのが辛いでしょう。途中で泣いてしまうかもしれないからやめようか」

と言っても、決心は固かった。彼らにはチャンスは一年に一度しかない。なんとしても優勝したい一心なのだ。

日本語の会話、抑揚、間のとり方などは実際にやってみせなければ無理だ。私は見本を見せるために声優さながらに恥も外聞も捨て、歳も忘れて演じてみせた。照れている暇などない。来年こそ、来年こそはと夢中で数年過ぎた頃、遂に優勝することができた。結果を聞いた時は応援に駆け付けた同僚の先生と、

「ウワー。やったー！」

溢れる涙とともにハイタッチをした。今までの苦勞が報われた瞬間だった。これ以後五回の優勝で、五人の学生の夢を叶えることができた。

学生のいちずな想いに心を揺さぶられ、夢を実現する手伝いをしたいと思ってスピーチの指導をしてきた。いつしか学生の志と私の志がぴったりと重なり、同じ目標に向かって夢中で挑戦してきた。学生の悔し涙が私を奮い立たせ、私の期待に応えようとひたすら努力する姿に力をもらった。

日本の教師生活で挫折を味わい、このままで終わりたくないと言本語教師になったモンゴルで、私は復活した。学生の「志」の高さ、それをやり遂げたエネルギーに、感謝とエールを送りたい。



下田歌子について

わが国女子教育の先駆者であり、歌人としても名高い下田歌子は、安政元（一八五四）年、美濃国岩村藩（現在の岐阜県恵那市岩村町）に生まれ、幼い頃より漢詩、和歌を詠むなど学才に恵まれ、明治四（一八七一）年、十六歳のときに上京、宮中に出仕し、その歌才を讃えられ皇后（後の昭憲皇太后）より歌子という名前を賜りました。

二十五歳で宮中を辞した後、女子教育に力を注ぎ、明治十八（一八八五）年に創立された華族女学校では幹事および教授兼学監を勤め、明治三十二（一八九九）年には私立実践女学校（現在の実践女子学園）を創立しました。その他、女性の自立を目指した女子工芸学校、経済的に恵まれない少女のための夜間学校を設立するなど、新しい時代の女子教育に生涯を捧げ、昭和十一（一九三六）年、八十三歳の生涯を閉じました。

岩村を離れ東京へ旅立つ時、国境の三国山で、生まれ育ったまちを振り返った下田歌子は、

「綾錦 着てかえらずば 三国山 またふたたびは 越えじとぞ思ふ」と、歌に託してふるさとへの深い思いと決意を詠みました。

下田歌子賞について

下田歌子賞について

下田歌子賞は、平成十六（二〇〇四）年に下田歌子生誕百五十年を迎えるにあたり、下田歌子先生のおふるさとである旧岩村町（現、岐阜県恵那市岩村町）が岐阜県、実践女子学園、PHP研究所の協力を得て、下田歌子先生の業績を顕彰しつつ、エッセイ募集を通して、これからの生き方、考え方、教育のあり方を、共に考え学ぶために設けた公募賞です。平成十五年度の第一回募集以降、毎年全国各地から多数の秀作が寄せられています。

審査経過報告

本年度の下田歌子賞は、平成二十九（二〇一七）年度の第十五回、三十三年度の第十六回、昨年度の第十七回に続き、下田歌子先生が、故郷・岩村を後に東京へと旅立つ時に詠んだ「綾錦の歌」のとり、「志」をテーマにしました。本年度は、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言により、年初より外出自粛や学校の休校が長引くなかで、本事業を家庭での学びに役立てていただくため、エッセイの部、短歌の部ともに、例年より一か月早めに、令和二年五月より募集を開始。九月までの約四か月間の募集期間で、エッ

【各回の募集テーマ】

回	年度	エッセイの部	短歌の部
第1回	平成15年度	「男らしさ、女らしさ」	……
第2回	16年度	「出会い」	……
第3回	17年度	「家族みんなで考えよう 『我が家の約束』と」	……
第4回	18年度	「父・母・祖父母の教え」	……
第5回	19年度	「父・母・祖父母・兄弟・子どもたち 『忘れられないあの一言』」	……
第6回	20年度	「家族への思い」	……
第7回	21年度	「先人に学ぶ」	……
第8回	22年度	「先人に学ぶ」	「家族・思いやりの歌」
第9回	23年度	「先人に学ぶ」	「絆」
第10回	24年度	「母」	「母」
第11回	25年度	「ふるさと」	「ふるさと」
第12回	26年度	「ふるさと」	「ふるさと」
第13回	27年度	「家族」	「家族」
第14回	28年度	「家族」	「家族」
第15回	29年度	「志（夢・願）」	「志（夢・願）」
第16回	30年度	「志（夢・願）」	「志（夢・願）」
第17回	令和元年度	「志」	「志」
第18回	2年度	「志」	「志」

※「短歌の部」は第8回から募集

※第3回は、エッセイではなく、標語募集

※第4回 第5回 第6回は、恵那市合併を記念して、エッセイの部とは別に「写真の部」ふるさと再発見！あなたが選ぶ恵那市の新名所」も募集。

セイの部は、小学生の部百十五作品、中高生の部千百八十八作品、一般の部二百二十二作品の秀作が全国より寄せられ、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会による事前審査の後、作家の童門冬二氏を審査委員長に、吉田公平東洋大学名誉教授、城島栄一郎実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長、寺田昭一PHP研究所シニア・コンサルタント、小坂喬峰恵那市長の五名の審査委員による最終審査の結果、各部、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作五作品の九作品を受賞作品に決定しました。

短歌の部は、小学生の部九百九十九首、中高生の部八百四十四首、一般の部三百二十六首が寄せられ、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会の事前審査により各部十首を候補として絞り込んだ後、恵那市民による投票により各部門五首を入選作品として選びました。

なお、例年、表彰式後の記念イベントで、エッセイ募集の小学生の部、中高生の部の受賞者が、受賞作品を朗読し、会場参加者全員が投票審査をする朗読コンクールを行ない、各部それぞれ三名に「嚶鳴協議会賞」を贈呈していますが、本年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、朗読コンクールと嚶鳴協議会賞は中止しました。

学校賞の授与について

平成三十年度の第十六回下田歌子賞より、「学校賞」を授与しています。この賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、または両方に、学校で取り組まれ、顕著に応募数の多かった学校に授与させていただく賞で、本年度は、「小学生の部」五校、「中高生の部」十三校に記念品として盾を贈呈しました。



上左：VTRによる童門冬二氏の審査講評 上中：オンライン参加の受賞者・関係者の紹介 上右：VTRによる初風緑さんの歌の披露 中左：表彰式会場 中右：実践女子大学渋谷校舎からオンラインで受賞者に語りかける初風緑さん（記念トークショー） 下左：短歌の部小学生の部の代表者への賞状授与 下中：最優秀賞受賞者のみなさん 下右：モニターで会場の様子を見ながら、カメラを通して受賞者に語りかける初風緑さん

表彰式と記念イベントについて

下田歌子賞の表彰式と記念イベントは、平成十五年度の第一回以来、下田歌子先生のふるさと岐阜県恵那市岩村町の岩村コミュニティセンターで開催してきましたが、本年度は、新型コロナウイルス感染拡大に対応して、三密が回避でき、インターネットによるオンライン中継環境も整った恵那文化センター大ホールに会場を変更。感染症対策を充分に施して開催し、会場に参加できない受賞者・関係者とはオンラインで結ぶとともにYouTubeでの同時配信も行ないました。また、例年開催している記念イベントも中止。エッセイの部・短歌の部ともに、受賞者・受賞作品を画面とナレーションで紹介した後、受賞者代表への表彰状授与とエッセイの部最優秀賞受賞者による受賞作品の朗読。東京で事前に収録したVTRによる童門冬二氏の審査講評の後、元タカラジェンヌで実践女子学園高等学校出身の初風緑さんが、実践女子学園中学校高等学校正門と実践女子大学渋谷校舎から、リアルタイムのオンラインで、約三十分間の記念トークショーを開催。オンラインを通じた会場参加受賞者との質疑応答も交えながら、楽しく学びの多いひと時を過ごしました。初風緑さんは、実践女子学園創立百二十周年の下田歌子音楽劇「ことほぎ」の脚本・構成・演出を手掛けられたことをご縁に、令和元年度より下田歌子賞事業にも特別ゲストとしてご尽力をいただいています。本年度より、恵那市観光大使にも就任されました。

なお、表彰式の模様は、恵那市ケーブルテレビ・アミックスCOMの番組としても放送していただきました。

嚶鳴協議会と嚶鳴協議会賞について

嚶鳴協議会は、ふるさとの先人の事蹟や教えをまちづくり、人づくり、心そだてに活かしている自治体が、それぞれの情報交換や交流、連携を通してよりよき地域づくりを探索するための協議会です。「嚶鳴」とは、中国最古の詩集『詩経』に出てくる言葉で、鳥が仲間を求めて鳴き交うという意味。転じて、仲間が集まり切磋琢磨しながら互いに学び合い教え合うことを意味します。名君・上杉鷹山の師として名高い愛知県東海市出身の儒学者・細井平洲が江戸に開いた私塾を「嚶鳴館」と名づけたことでも有名です。

加盟自治体を持ち回りで毎年開催する「嚶鳴フォーラム」の他、市町長会議、教育長会議の他、行政職員や市民の交流事業等活発な活動を行なっています。また、平成二十七年、東海市芸術劇場の二階に「細井平洲・童門冬二記念 嚶鳴広場」がオープンしたことにより、加盟自治体の情報発信の場として嚶鳴広場が利用されています。

嚶鳴協議会賞は、協議会参加自治体が行なう公募事業等の中で、協議会の趣旨に添った事業に対して授与する賞で、平成二十二年度より授与しています。下田歌子賞事業では、第八回よりエッセイ募集小学生の部、中学生の部、一般の部それぞれに、嚶鳴協議会賞一作品を授与してきましたが、平成二十八年度より、小学生の部・中学生の部の入賞者を対象に、表彰式当日、自分の作品を朗読する朗読コンテストを実施し、会場参加者の審査により、各都上位三名に嚶鳴協議会賞を授与することになりました（本年度は中止）。

【参加自治体（令和二年六月現在）】恵那市 大野町 沖繩市 小田原市
釜石市 木曽町 高鍋町 多久市 竹田市 田原市 東海市 長野市

日田市 養父市 米沢市

【企画運営協力】PHP研究所

【事務局】愛知県東海市教育委員会社会教育課内

【ホームページ】https://www.tokai-arts.jp/oumei_forum/

岐阜県恵那市と実践女子学園の連携協定

下田歌子を学祖とする実践女子学園と生誕地恵那市は、先人顕彰事業「下田歌子賞」をはじめとして、中学生の修学旅行や、大学・短期大学の夏季セミナーなど活発な交流が進められてきましたが、さらなる相互の学術・文化の向上と地域の振興に寄与することを目的として、平成二十二年十月二十七日（土）、第八回下田歌子賞表彰式・記念イベントに合わせて、実践女子学園と恵那市の連携協定が締結されました。昨年度（令和元年度）は、恵那市市制十五周年を迎えるとともに、実践女子学園創立百二十周年という記念すべき年を迎え、令和元年五月七日に、恵那市岩村町の下田歌子先生生誕の地で実践女子学園創立百二十周年記念式典が開催されました。また、下田歌子賞（第十七回）も、恵那市市制十五周年・実践女子学園創立百二十周年記念事業として開催されました。なお、元恵那市教育委員長で岩村町在住の鈴木隆一氏が実践女子学園恵那市親善大使及び実践女子学園岩村親善大使を、前岩邑中学校校長の相原正文氏が実践女子学園岩村親善大使を、実践女子学園高校出身の元タカラジェンヌ・初風緑さんが恵那市観光大使を務めておられます。また、昭和六十二（一九八七）年以来、実践女子学園出身の女優・渡辺美佐子さんが岩村城の「女城主」を務めておられます。



募集チラシ（表面）



募集チラシ（裏面）

志

第18回 下田歌子賞受賞作品集

2021年3月 発行

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会

(恵那市教育委員会生涯学習課内)

〒509-7292 岐阜県恵那市長島町正家1-1-1
TEL 0573-26-2111

学校法人実践女子学園 経営企画部

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1
TEL 042-585-8804

(株) PHP 研究所 研究推進部

〒136-8137 東京都江東区豊洲5-6-52
TEL 03-3520-9612

〔表紙「志」の書〕 神谷慎軒
〔編集・制作協力〕 株式会社志學社
〔デザイン・印刷・製本〕 丸理印刷株式会社

